

市民権運動時代のアメリカの総括へ向けて

セカンド・レデンブション サード・レコンストラクション
——「第二次復権」の下で個人的体験を顧みつつ「第三次再建」を
展望する試み——

川 島 正 樹

はじめに——「歴史は繰り返す」は法則か

(1) 「第二次再建」概念の浸透

本日はお招き頂き、感謝に堪えません。小原豊志先生をはじめ関係諸氏に心より御礼申し上げます。ご期待に応えられる自信はございませんが、折角頂きました過分な引退興行のお座敷ですので、精いっぱい務めさせて頂く所存です。実証的研究の報告というよりも、全共闘的アジ演説ないし新興宗教教祖の説教のようになりがちですが、遠方より足を運んだ退職間近の老人の戯言として、どうかご寛恕のほどをお願いします¹⁾。

まず本日のお話の前提になる「第二次再建」という用語についてご説明します。「第二次再建(The Second Reconstruction)」という歴史用語は革新主義的南部史家として名高いC・ヴァン・ウッドワードのベストセラー『ジム・クロウの奇妙な軌跡』において使用され始めました〔Woodward 1974: 8-10, 122-147〕。

ご存じのように、南北戦争後の「再建」は挫折に追い込まれましたが、第二次世界大戦とホロコーストの衝撃、さらには共産主義的平等理念を掲げたソ連との冷戦下で起こるアジア・アフリカ旧植民地独立という「第三世界」の興隆に呼応して「人種」をめぐる国内問題への対応を迫られたアメリカが、1950年代後半から60年代にかけて取り組むことになったのが「第二次再建」です。やがて80年代のレーガン政権下で右旋回が本格化し、国際的にはソ連崩壊とともに冷戦が終結し、「第三世界」諸国内部で様々な問題が表面化し、理想に満ちたアメリカの「第二次再建」は終焉の時を迎えます。2003年に日本において国際的なヒトゲノム解析共同プロジェクトの完了が宣言された際に、生物学的概念としての「人種」の非科学性が明らかにされましたが、「黒人の命も大切だ」と訳されるBLM(Black Lives Matter)運動の昨今の隆盛が示すように、依然としてアメリカ

1) 本稿は、2023年11月18日土曜日14時から18時にかけて東北アメリカ研究会との共催で東北大学川内キャンパスにて開催された「2023年度 東北大学国際文化研究科科長裁量経費プロジェクト『多文化・グローバル社会におけるアメリカ研究ネットワークの構築』第一回講演会」で本稿筆者が行った「『市民権運動時代のアメリカ』の総括へ向けて——かつての現地調査を振り返りつつ『第二次復権』を超えて『第三次再建』を展望する試み」と題して行った講演会時の読み上げ原稿を基に、当時の雰囲気を残すために本稿筆者を「報告者」と記述していること、また活字化する時点(2024年2月)で気づいた勘違いの修正や必要と思われる説明文や一部の新たな文献の付加などを施して改稿したことをご了解されたい。本講演会企画関係諸氏および口語形式での掲載を許された本誌編集担当同僚諸氏のご高配に対して、この場を借りて深謝する次第である。

において社会的構築物として制度に深く埋め込まれた「人種」は堅固なままであると言わざるを得ません [川島編著 2005；2014b；川島 2021a；川島 2021b]。

(2) 「米国史上初の黒人大統領」の誕生と「第二次復権」の始まり

2008年秋のサブプライム・ローン破綻に起因する、^{グレート・ディプレッション}「大恐慌」以来80年ぶりのアメリカ発の世界的「大不況」^{グレート・リセッション}の処理を期待されて誕生したのが「米国史上初の黒人大統領」でした。しかしながら、「ハゲタカ金融資本」の餌食にされた黒人ゲッター住民の救済は不十分で、最多で160万人に及ぶ、その多くを黒人男性が占める「大量収監」^{マス・インカーセレーション}と、有望な公共事業とされた「監獄ビジネス」の隆盛とそれを支えた連邦政府を挙げての警察組織の強化がもたらした警官の横暴という異常事態が劇的に改善されることはありませんでした。言論の世界ではバラク・オバマ (Barak Husein Obama II) を二度も大統領に選んだことを主な根拠に「ポストレイシャル・アメリカ」の到来が叫ばれました。その一方で「茶会」運動^{ティーパーティー}に象徴される草の根右翼の地域的運動が各地に浸透してそのネットワーク化が進み、2016年の大統領選挙ではドナルド・トランプ (Donald Trump)^{レコンストラクション}が選ばれ、南北戦争後の北軍による南部軍事占領下の「再建」^{レディング}の終焉が南部反動派の「復権」を生んだように、「第二次再建」の終幕が「第二次復権」に繋がったのです。まさに「歴史は繰り返す」という格言を目の当たりにしているのです [川島 2021a]。

(3) 新歴史観としての「長い市民権運動」の提起と「第三次再建」の展望

高揚するトランピズム (≡トランプ前大統領への熱狂的な支持拡大という社会現象) に待ったをかけたのはBLM運動でした。なぜ道徳的にはより正しいALM (All Lives Matter) ではなく、BLMが多くの人々を含む大半のアメリカ人の心に届いたのでしょうか。この事実こそがアメリカにおける社会的構築物としての「人種」に基づく差別と偏見の根強さを物語っているのですが、それと共に地域的社會運動が全国に波及するというアメリカ独特の革新主義の伝統に根ざす歴史的特徴を思い起こさせもします。コロナ禍の下でBLM運動の高揚がなければ、3年前の大統領選挙で現職大統領の退陣はあり得なかったでしょう [川島 2021a]。

これと重ねて思い起こされるのは、ジャクリン・ダウド・ホールが2005年に提起した「長い市民権運動」^{ロング・シヴィルライツ・ムーブメント}という概念です。彼女は1930年代のニューディール期から40年間続いた黒人と白人リベラル派と労働組合組織化運動の共闘による広範で持続的な政治連合という歴史的な事実を掘り起こしました。トランピズムの高揚以降のアメリカでは主に「人種」を境界線としたアメリカ社会の分断の深刻化が強調されがちですが、前大統領と雖も公然とヘイト発言を許されない、少なくとも露骨な差別には絶対的に不寛容な社会規範を確立したのは、戦前からの「ニューディール連合」と呼ばれる「人種」を超えた持続的な民衆レベルの政治的連帯だったのです [Hall 2005]。

現時点でもトランプ人気の根強さは驚くほどで、来年の今頃には結果が出るアメリカの大統領選挙は世界中の人々に懸念を高まらせていますが、前回の大統領選挙の帰趨を決定したジョージア州の選挙結果で外から見て明らかな前大統領の重大な犯罪の疑いを許さない姿勢を示したのが、二人の黒人女性であった事実は看過できません。一人は元民主党知事候補であった前州上院議員ステイシー・エイブラムス (Stacy Abrams) であり、もう一人は選挙結果への不当介入を禁じる州法違反の嫌疑で前大統領を起訴したフルトン郡検事ファニ・ウィリスです (Fani Willis)。このこと自体が「第二次再建」がもたらした輝かしい成果ともいえますが、将来から見れば「第三次再建」の幕開けともなるかもしれません [川島 2023a；Richard 2016；三牧 2020]。

(4) アメリカの覇権衰退と並行したコロナ禍とロシアによるウクライナ侵攻

ここで確認したいのは「デモクラシーの帝国」とも呼ばれる超大国アメリカの世界覇権の衰退によって明らかになりつつあるその功罪二面性です。ベトナム戦争が象徴した「アメリカ帝国主義」の「罪」の側面は私の世代にはお馴染みですが、ここで敢えて強調したいのは、アメリカの覇権の衰退が今日のロシアによるウクライナ武力侵攻と核戦争という人類破滅の危機と日本の近辺で見られる国際政治情況の深刻な悪化傾向と表裏の関係にあるという、アメリカの覇権の「功」の側面が否定し難いということです。アントニオ・ネグリ (Antonio Negri) が勧める「親米主義」もこの観点から考慮すべきです [藤原 2002; 「新しい民主主義へ」 2012]。

もう一つ指摘すべきは元ブラック・パンサー党活動家でカリフォルニア州選出黒人女性連邦下院議員バーバラ・リー (Barbara Lee) が主張する、絶対平和主義と一線を画す現実主義的非暴力主義です。彼女は名古屋をはじめ各地で上映された自伝的映画の中で「非暴力主義」を掲げつつも「暴力行使の無条件の放棄は留保する」と明言しています。彼女はクラスター爆弾のウクライナへの供与には極めて慎重な一方、ロシアの侵略と戦うウクライナへの軍事支援には賛成です。彼女は自衛的な武装を掲げて最後は弾圧と内部分裂で潰されたブラック・パンサー党の負の経験を内面化すると同時に、アメリカ帝国主義の侵略性との闘いという同党が掲げた理想を現実政治の中で追求し続け、2年ごとの選挙で圧勝し続けました [ギンズバーグ 2020]。

(5) 「自由」と「平等」の難題を解くと同時に「分断」も煽る社会運動の二面性

地域闘争の全国化というアメリカ史に独特の革新主義的伝統の最新事例は先ほども触れたBLMです。BLMはSNSへの動画のアップロードを通じて世界的に支持者を拡大し、事前の予想を覆して前回大統領選挙で現職(当時)の再選阻止に大きな影響力を発揮し、革新主義的伝統への希望の糸を紡ぎました [川島 2020]。

その一方で、アメリカ研究という学問分野で一般的に好意的に受け止められてきた多文化主義をめぐっては、哲学や政治思想研究の分野で論争が激化しています。一つは「相互承認」の推進という文脈で多文化主義を支持する陣営であり、他方は「承認の政治」に内在する分断助長の傾向と経済的格差を軽視する傾向に批判的で、新たな再配分を実現するための政治的連合の構築をより重視する陣営です。両陣営は本来的には対立的であるよりも相互補完的なのですが、革新主義陣営内部における力点の違いは^{アップヘーベン}困難なままです。この状況は1968年の大統領選挙に幾分似ています。トランプ前大統領は3年前の選挙で自らの敗北を認めなかったばかりか、過激な支持者の武力による連邦議会への乱入を煽り、何度も訴追を受け、その度に支持を拡大しています [Fraser & Honneth 2003; Fraser 2022]。

(6) オーラル・ヒストリーの勧め

ところで、歴史家である以上、避け難い「歴史の原動力とは何か」という問いへの自分なりの回答も試みたいと思います。本報告のサブテーマでもあるオーラル・ヒストリーによる現地調査を基にした歴史研究の経験から申し上げられるのは、歴史を動かすのは言葉というよりも、その言葉を発する人間であるという結論です。どうしてそのような確信に至ったかという点につきましては、後ほど過去のインタビューの一部をご紹介しますことで、聴衆の皆さんにも実感いただけるのではないかと思います [川島 2003; 川島 2008; 川島 2015; 付録 1]。

次にオーラル・ヒストリーについて、この手法に内在する効用よりもむしろ限界について申し上げ

げたいと思います。歴史的当事者へのインタビューによって期待できるのは大半の場合に新たな事実の発見ではない、という現実的な限界です。誰でも自分を正当化したいと思うのは当然ですし、特殊な事情がない限り仲間を売りがる人もあまりいません。正確かつ正直に過去の事実の全てを語ってくれる人は稀ですし、重要な関係者が物故している場合もあります。事実接近するためには対立者も含め、様々な陣営に属す多様な関係者の証言をできるだけ多く集め、比較分析する必要がありますが、それは事実上困難です。ではどのような効果を期待できるのかと言いますと、相互に矛盾をはらむ場合がある入手可能な文書史料の比較分析もそうですが、何よりもヘーゲル主義的な用語で言う「時代精神」^{ツァイト・ガイスト}に類する、その当時の息吹の共有が可能となる点です。これによって、歴史家はその時代に我が身を置き、まさにその人物になり切って、その事件なり事象なりを追体験することが可能となり、歴史的真相への接近と理解が深まるのです [川島 2023b]。

同時に、歴史的関係者へのインタビューを含む現地調査によって、アメリカ研究という学際的地域研究が目指すところの「アメリカ」という価値観の共同体における歴史的経験の意義の理解と今後の方向性を見定める学問的な作業において不可欠な研究対象の内面化も可能となります。とりわけ外国人として地域研究を志す場合には、多くの場合に研究者の情熱を支えうる何某かの根拠が不可欠の要素となりますが、歴史的関係者へのインタビューは歴史家を支える情熱の貴重な源泉を提供してくれます [川島 2015]。

1. 現地調査体験と「長い市民権運動」^{ロング・シヴィルライツ・ムーブメント} 史観を重ねる試み

(1) ジョージア州南西部農村地帯における個人的体験

先に触れた「長い市民権運動」の存在をホールによる提起以前に実感したのは、2001年夏にジョージア州南西部の農村地帯に所在するオールバニーでの現地調査においてでした [川島 2008：第4章；付録1：(3)]。1960年2月1日にノースカロライナ州グリーンズボロで始まり、瞬く間に南部中に拡散してSNCC（学生非暴力調整委員会）の創設と隆盛に対抗して当地で計画され1年間続いたキング（Martin Luther King, Jr.）牧師とSCLC（南部キリスト教指導者会議）が主導した最初の地域闘争が始まるのは1961年秋でした。詳細は拙著をご一読頂くことにして、通史的には「敗北」とされてきたオールバニー運動がキング牧師の撤退後も続けられたという事実について指摘したいと思います。多くの逮捕者を出しながら抗議活動が続けられたのは地域の女性たちの勇気と根性によってだったのですが、地域的市民権運動の持続的な高揚を支えたのは長い伝統を誇る黒人教会を中心としたゴスペル・ソングの力でした。2001年当時毎月第二土曜には当時の集会を再現した催しが実演されていました。詳しくは後ほど写真付きでご説明します [付録1：(3)]。

(2) アラバマ州モンゴメリーの黒人エリートが越えなければならなかった壁²⁾

次に「黒人コミュニティ」と呼ばれる地元地域共同体は歴史的に所与の条件ではなく、運動の経過の中で次第に形成されたものであるという事実について、市民権運動の最初の事例とされるアラバマ州都モンゴメリーにおけるバス・ボイコット闘争について触れながら、考察したいと思います。

2) 以前の拙稿 [川島 1992 等] では「モントゴメリー」と呼称したが、本稿では現地での標準的な発音に即して「モンゴメリー」と記載する。

詳細は拙著をご一読頂きたいのですが、要点についてのみ指摘します。他の事例でも共通する事実ですが、運動開始時点で「黒人コミュニティの一体性」などは存在していませんでした。それは運動の過程で次第に形成されたのです。一般庶民の多くは白人に雇用されており、黒人会衆に支えられている黒人教会の牧師の多数も戦闘的な SCLC には批判的でした。ジム・クロウの副産物としての僅かに存在した黒人相手に商売する自営業者や黒人教員から構成される黒人中産階級の大半も現状維持派でした。差別の最前線に日常的にさらされ続けた一般民衆が一部の中産階級による「抗議運動」の呼びかけに呼応するのは、モンゴメリーの場合には、市内のバスに代わる輸送手段として「カー・プール」と呼ばれる自動車相乗り運動に対抗して法制化された「ボイコット禁止法」で黒人中産階級が大量に逮捕されて以降でした。「逮捕」と「投獄」という経験は大変な不名誉と経済的打撃を伴いました。黒人中産階級がそれを乗り越え、集団逮捕という踏み絵を踏む覚悟に至ったことで、ようやく民衆レベルでバス乗車拒否という堅固な地域闘争となるのです [川島 1992；川島 2008：第 1 章]。

もう一つ看過しえない事実は、アングロサクソン系文化的伝統とも言うべき事後の復讐です。市民権運動の出発点となったモンゴメリー・バス・ボイコット運動の発端の「一日だけのボイコット」を呼びかけるビラを撒き、その後も要所々で運動の組織的發展を支えた WPC（女性政治会議）の中心を担った州立黒人大学の女性教員たちが、事後大分経った 1960 年の新学期に一齐に解雇されたという事実です。おそらく運動のきっかけを作ったローザ・パークスがデトロイトへ転住した背景にも、同様の事象が影響したのではないかと疑われます。ただし、彼女らが歴史の転換点に関与できたことに満足しているのも事実です [川島 1992；川島 2008：第 2 章]。

(3) 旧南軍首都に漂い続けるジム・クロウの亡霊

ここでジム・クロウの復活を企図した地元反動派のあからさまな報復的意図の強烈さを実感した個人的体験についてお話しします。主要企業が公募採用を中止する「第二次石油危機」が間もなく起こる 1978 年春、間が悪いことに留年が確実となった時に 4 週間有効のグレイハウンド・バス自由乗車券を購入してアメリカ全土の旅行を試みました。かつての南部連合国最後の首都であったヴァージニア州リッチモンドのバス・ターミナルに降り立った時のことです。立ち寄りとしたトイレに男女それぞれに二組ずつの施設があり、その一方には鎖が掛けられ使用禁止となっていることに気づき、奇妙な感じを抱いた直後に言い知れぬ恐怖感に襲われました。バス・ターミナル施設全体が比較的最近に改修されたばかりで、新しい感じがしました。そのことは、いつでも「人種別トイレ」を含む隔離施設としての使用再開が可能であるという、言外の固い意志表示のように思われました。まさに「ジム・クロウの亡霊」を実感した瞬間でした [Higginbotham 2013; Walker 2009]。

(4) 「リトルロック学校危機」事件をめぐる

次に「長い市民権運動」のもう一つの事例として、1957 年 9 月の新学期始業日に白人民衆数千名が暴動を起こした「リトルロック学校危機事件」の現地調査について触れます。暴徒たちは生徒総数約 2000 名の地元名門高校へのたった 9 名の優秀な黒人生徒の入学に反対したのですが、子どもを学校に通わせる南部白人の多くが学校の「人種統合」に関して共通に恐れたのはまずトイレ共用やプールでの水泳授業に伴う「性病罹患」への不安であり、次に「学校統合」で刺激される黒人中産階級の転入によって自宅をはじめ所有する不動産価値が下落することでした。後者は

「街区破壊商法」と呼ばれる悪徳不動産商法で、「黒人が転入するそうだ」という噂を意図的に流して不動産価格を引き下げて白人所有者から安く買い叩き、それを白人地区への転入を望む黒人の金持ちに高値で売りつけ、転出する白人に郊外地区の新開発住宅を売りつけるというものです [川島 2008：第2章：付録1：(2) ④]。

詳細は後述しますが、これはオーラル・ヒストリーが「新たな発見」をもたらした稀有な事例というべき個人的に思い出深い体験でした。一口に「人種」にまつわる偏見と申しますが、このように自由である筈の市場経済に「人種」偏見は深く埋め込まれて制度化されており、個人レベルでも無視しえない経済的損失につながることから、なかなか現在に至るまで解消され難いままなのです [川島 2008：第2章：付録1：(2)]。

(5) 白人優越主義が経路依存症であることの例証としてのトランプイズムの隆盛

この章の最後に触れたいのは、なぜ旧南軍支配地域で奴隷制廃止後 170 年近く経過してもなお白人優越主義が根深く蔓延ったままなのか、という問いです。トランプイズムの隆盛の背景とも重なるその理由を考察したいと思います。それは現在のアメリカの経済的な覇権衰退傾向への抵抗感を背景とした「アメリカ第一主義」の高揚に象徴される大衆煽動政治^{ポピュリズム}なのかと申しますと、そうとばかりは言い難く、南北戦争前の奴隷制の時代から何世代も続く経路依存症^{パス・ディペンデンス}という集団的精神病理の表れであるとする注目すべき主張が近年若手の政治学者から出されております [Acharya, et al. 2020]。ただし、私見によれば、これとても 19 世紀末に形作られ始めたジム・クロウという地方法体系による「人種」による隔離と参政権の剥奪、さらには黒人男性を標的として大衆娯楽的な見世物として定期行事化されたリンチの横行による、世代を超えて徐々に制度化された特定集団への劣等性の烙印と主流派下層集団の優越感を掻き立てる支配階級による「人種」に基づく階層秩序化という、奴隷制の時代とは似て非なる、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのジム・クロウ体制という地域的文化的初期設定がもたらしたものと理解されるべきであり、その歴史的呪縛の解消は困難ですが、不可能ではないのです [川島 2014；川島 2023b]。

ただし、前世紀末、クリントン政権が終わる頃に出版されたティモシー・ミンチンによる南部繊維工業界における黒人労働者の採用増と労働組合活動および 1964 年に成立した市民権法の特に同法第七編の威力との関係に関する長期的で詳細な研究によれば、長年にわたり白人が独占してきた繊維工場での黒人労働者の採用増の動きが本格的に起こるのは市民権法の成立以降の 1970 年代と 80 年代です。広範な社会運動が職場における「人種」に基づく差別禁止の強力な連邦法をもたらしたというよりも、全体的には断固たる罰則規定を含む連邦法の成立が南部各地の工場現場における労組の動きの活発化をもたらしたのであり、因果関係は逆なのです。しかもそのような時期は NAFTA（北米自由貿易協定）による製造業の国外脱出と南部においてさえ金融関係の給料が高く肉体的に負担の少ないホワイトカラー職の人気の高まる時期と重なったのです。繊維工業界をはじめとする過酷な職種により多く黒人が多く採用される時期に白人たちはより有利な金融関係業界のホワイトカラー職にシフトしたのです。つまり経済のグローバル化と産業構造の変化を背景とした「人種」による有利な職種とそうでない職種での住み分けという新たな事実としての隔離状況が静かに進行してきたのです [Minchin 1999]。

振り返れば、1920 年代に主に「反ユダヤ主義」を含む移民排斥運動の一環で北部や西海岸諸州で 500 万人の会員数を誇った第二次 KKK (Ku Klux Klan) の突然の衰退が幹部の逮捕という偶然的なきっかけによるのもであった事実を突き止めたリンダ・ゴードンが予言したように、2020 年

の大統領選挙の時点で起こったトランプイズムの停滞も一時的で偶然のものであり、いつでも再生の可能性がある、と彼女は見抜いたのですが、まさにその通りとなっているのは慧眼と言わざるを得ません。ヒトラーが先例としたのはアメリカでのジム・クローヤ第二次 KKK の隆盛であり、アメリカが第二次世界大戦でナチズムと戦ったのも、さらにはそれに勝利できたのも歴史的必然などではないことも思い起こすべきです [Gordon 2017; Whitman 2017]。

2. 世界覇権確立へ向けた「反共」原則に基づく「第二次再建」

(1) 「デモクラシーの帝国」による世界覇権確立過程の重層的な意義

ここで第二次世界大戦後の「第二次再建」の発端から終焉までの歴史をざっとおさらいします。まず記憶されるべき事実は、後に「第一次世界大戦」と呼ばれることになった欧州での「世界戦争」に遅れてアメリカが参戦したのは直接国益に関わらない「世界を民主主義のために安全にする」という、後に「ウィルソニアニズム」(Wilsonianism) と呼ばれることになる、主に理念的な理由に基づいてであったことです。その理念が国民的に受け入れられるのは二度目の世界大戦を経験してからでした。ここで看過しえないのは、1930年代の「大恐慌」を最終的に終わらせたのは「ニューディール」の諸政策ではなく、アメリカの参戦より2年3ヶ月と1週間前に欧州で勃発した第二次世界大戦をきっかけとした軍需景気だった事実です。戦後の平時経済への再転換で一時落ち込んだ経済を再生させたのも朝鮮半島で起こった戦争でした。ベビーブームと共に戦後の好景気が続き、膨大な中間層を創出され、理想の実現という明るい未来への期待感を高めるとともに、市民権運動の高揚と国民的支持の広がり背景ともなりました。これらはアメリカの覇権の増進過程と重なります [付録2: グラフ1]。既述の如く、平等を理念とするソ連との冷戦下で非白人国家が続々と独立する「第三世界」が高揚する時代に、19世紀末から続く国内南部の地方法体系によるジム・クロー容認姿勢を改めるという喫緊の必要性への認識が、リベラル派のみならず自由民主主義の世界的波及を掲げるアメリカの保守派指導層にも共有されたのです [川島編著 2005]。

(2) 日系人部隊に命を助けられたロバート・ウッドの密かな決意

戦争が及ぼした国民的衝撃に関する一例として、後にジョンソン (Lyndon B. Johnson) 政権下で閣僚の一人として北部大都市中心部のゲッターの問題解決に尽力することになるロバート・ウッド (Robert C. Wood) 氏へのインタビューで託された、遺言的で極めて私的な事実の開示についてお話しします。厳然たるジム・クロー体制下のミズーリ州セントルイス出身の彼が「人種」差別に反対する決意を固めたのは、激戦で知られるバルジの戦いにおいて日系人部隊の第442大隊の生き残り兵士に救出されたからであったそうです。その前に第442大隊は文字通り「当たって砕ける (Go for broke!)」の合言葉通りに、救出兵士数の二倍に当たる約800名の壊滅的な損害を出しながら包囲殲滅の危機にあったテキサス大隊の白人兵士を救出しました。これは想像ですが、小学校教師を辞して海軍士官として従軍したテキサス出身のジョンソン大統領がケネディの遺志を引き継いだ背景にも同様の思いがあったのではないのでしょうか [付録1: (1) ②]。

(3) 「赤狩り」下での「人種」を超えた階級的連帯の試み

「長い市民権運動」の事例で看過しえない近年の研究業績にマイケル・ピアースのリトルロック

における穏健派 AFL（アメリカ労働総同盟）系運輸労組白人指導者による、ポピュリストとして名高いオーヴァル・フォーバス（Orval Faubus）州知事との長い闘いに関する論文があります。本報告者が行った現地調査のうちで最も地域的安定感を抱けたのがリトルロックだったのですが、この論文を読みながら、当時そして現在も蔓延る、「人種」にまつわる偏見を煽るポピュリストに対抗して、働く者同士として経営側の分断化工作に対抗することの「共通利益」を説くオーデル・スマイス（Odell Smith）の不屈の闘いぶりや地元の良心的白人中産階級女性集団による応援の歴史があったことがよく理解できました。現在アーカンソー州は他の南部諸州と同じく共和党の牙城に変化していますが、かつてはビル・クリントン（William J. Clinton）が最年少の州知事に当選した実績もあり、この「長い市民権運動」は今も継続中であると思われます [Pierce 2018]。

(4) 最高裁判事全会一致での「ブラウン対教育委員会」判決

この章の最後に、「長い市民権運動」の時代における画期点をもたらすことになった「ブラウン」判決が9名の最高裁判事全員一致の判例変更であり、それをもたらしたのが、前職が戦中に日系人を強制収容したカリフォルニア州知事という保守派政治家出身アール・ウォレン（Earl Warren）による、憲法違反の疑いが拭えない、舞台裏で反対派判事に行った膝詰めの説得工作であった事実に触れたいと思います。全員一致の「ブラウン」判決という歴史的な判例変更は純粋な法律家よりも現実主義的政治家としての自己認識の強いウォレンであればこそ為し遂げられました [Kluger 1975]。その反面、その一年後に下される、判決実行に関して「できるだけ慎重な速度で」という、反動派を煽る結果を招いた「ブラウンⅡ」判決による後退と南部白人の「大衆の反抗」の高揚を招いたのも同じ政治家出身の最高裁長官ウォレンによってでした。その一方でウォレンはこれ以降も一連のリベラルな判例を出し続け、「ブラウン」判決時の原告側主任弁護士のサーグッド・マーシャルを黒人初の最高裁判事に指名するのに尽力するなど、市民権運動の後押しに大いに貢献したのは事実です [川島 2023a]。

3. 地域闘争の連鎖的高揚と「第二次再建」の完結

(1) 本来的なアフーマティヴ・アクションとしての「貧困との戦争」

この章ではつい先ごろ連邦最高裁で違憲の判断が下された現行の「アフーマティヴ・アクション」に関する語られざる歴史的事実を再確認します。とかく「ばらまき」という批判がされがちなジョンソン政権による大規模な財政出動を伴う「偉大な社会」構想の一環としての「貧困との戦争」は本来的にはアフーマティヴ・アクションとして位置付けられるべきであり、続く共和党のニクソン政権の「アフーマティヴ・アクション」は「小さな政府」の流れに沿う安価な政策で、問題の本質的解決への政府による関与を欠く、大都市ゲッターで続く「暴動」を弾圧しつつ「ブラック・パワー」とベトナム反戦のスローガンで高揚する急進的反政府傾向の沈静化を図る妥協的かつ戦略的な政策であったという事実です [Yuill 2006]。

「貧困との戦争」の開始に当たってジョンソン大統領は首都ワシントンに所在する黒人大学として名高いハーワード大学の卒業式で名誉法務博士の称号を授与された際に行った演説で、社会主義的な言説とされる「結果の平等」の必要性を宣言して聴衆の喝采を浴びました。それより少し前のキング牧師が主導してアラバマ州セルマで展開された投票権法の支持を掲げた抗議行動に呼応した演

説で、市民権運動や反戦運動の集会で参加者が共に手を組んで歌唱することが通例とされていた「我ら打ち勝たん (We Shall Overcome)」を演説の締めくくりの言葉として使用したことで、国民的な感動をわき起こしました。このような状況下で1世紀前に「法の下での平等保護」と市民権の差別禁止を規定した憲法修正第14条の実効化をようやく果たした前年の市民権法に続いて、投票権の差別を禁じた修正15条の実効化を意味する投票権法の成立を達成しただけでなく、福祉国家の完成を目指す「貧困との戦争」の諸政策によって「結果の平等」を達成する決意を表明しました。

後ほど統計グラフを示しつつ詳述しますが、確かに「貧困との戦争」の諸政策は短期間で効果を生み、黒人のみならず国民レベルで貧困率の顕著な低下をもたらしましたが、「可能な限り貧困者自身に参加させる」という参加型民主主義の実践例となった「貧困との戦争」は地元黒人社会の政治的腐敗を誘引するものでもありました。これも後ほど詳述しますが、言わば不都合な真実を敢えて暴露してくれた元活動家もいました [Watkins 2016; 付録2: グラフ1; 付録1: (5) ①]。

(2) 「アフーマティヴ・アクション」という名の「小さな政府」政策

1968年という年は世界的に激動の一年でしたが、特にアメリカではそうでした。1月末にベトナムで解放勢力の決死部隊が敢行した「テト攻勢」の後に戦勝の希望を断ち切られたジョンソン大統領は11月の選挙に不出馬を表明しました。後に詳述しますが、4月4日にテネシー州メンフィスでキング牧師が暗殺され、6月6日には有力大統領候補のロバート・F・ケネディ (Robert F. Kennedy) が銃撃を受け、翌未明に亡くなりました。8月の民主党全国大会では混乱の中で反戦派の学生に受けの悪かったハンフリー (Herbert Humphrey) 副大統領が候補指名を受け、多くの若者たちが失望感に苛まれ、選挙をボイコットし、「法と秩序」を掲げる元副大統領リチャード・ニクソン (Richard M. Nixon) が僅差で大統領に選ばれました。こうして「激動の60年代」は事実上終わり、財政悪化に苦しむアメリカは「大きな政府」から「小さな政府」に舵を切ることになるのです [川島 2018]。

既述の如く、ニクソンが採用した、具体的には連邦公共事業関連労働者採用活動における黒人に対する優先枠設定に端を発する所謂「アフーマティヴ・アクション」はほとんど付加的費用を要しない「小さな政府」政策に類するものでした。やがてこの「アフーマティヴ・アクション」は公立大学さらには有力私学や大学院の入学選抜においても採用されることになります。白人男性に対する「逆差別」をめぐる1978年に最高裁が僅差で下した「パーキ」判決で、当初原告の医学部入学が認められますが、「アフーマティヴ・アクション」は存続が認められました。ただし、その理由付けは「過去の差別への補償」から「未来の多様な社会への準備」へと変更されました。さらに1987年の「ジョンソン」判決で、対象となる「少数派」に白人を含む「女性」が加えられました [川島 2014: 第5章, 第7章]。

(3) シカゴの「犯罪多発地区」での衝撃的な出会い

ここで60年代半ばの「法の下での平等」の達成という勝利後のキング牧師の早すぎる晩年の闘いについて触れます。彼は次なる闘争の地を北部大都市ゲットーに定め、シカゴの最貧地区で犯罪多発の「危険地帯」として悪名が高いウェストサイドのノースローンデイル (North Lawndale) 居住区のアパートに住み込み、「非寛容的」と見なされていたエスニック系白人労働者居住区に連日「住宅開放」を求めるデモ行進をかけますが、南部でも遭ったことのない暴力的反発を受け、顔面に負傷し、事実上の撤退を余儀なくされます。ですが、彼の真摯な態度と気さくな人となりで直接触れ

た地元の心ある若い世代の人々に大きな影響を及ぼしたのも事実です。その一人がリチャード・バーネット (Richard Burnett) 氏でした。後ほど詳述しますが、地元の黒人新聞の記者でも同地区を訪れることなく殺人事件についての記事を書くそうですが、そのようなゲッターの中でも最も危険とされるノースローンデイルを二つの夏休みに訪れた本報告者は地元民から大歓迎を受けました。続いてバーネット氏からは次のような忠告を受け、報告者はすんでのところ命の危険から身を守ることができました。それは「この地区で怖いのはギャングではありませんよ。彼らは金がないので銃は持っていませんよ。せいぜいナイフです。至近距離に近づかなければ問題はありません。一番怖いのは警察官です。彼らは怪しいと思うと自己防衛的にまず発砲してから身体検査をするのです。運転中にパトカーが横付けで近づいてきたらそのまま知らん振りして運転し続けなさい。そのうち目視の確認と共にレンタカー会社にナンバープレートの照会が貴方が日本の大学教員であることが分かれば、すぐ遠ざかる筈です」という物騒な注意でした。こんな場面に出会ったら車の速度を上げて逃亡しようなどと考えていましたが、間もなく出くわす実際の場面で本当に命拾いをしました。後にBLMで問題化されることになる警官の問答無用の発砲はずっと以前からゲッターでは常識でした [付録1: (6) ①]。

(4) ジム・クロー廃止は「南部の北部化」をもたらしたただけだったのか

拙著の結論でも書きましたが、結局のところ市民権運動をもたらしたのは「南部の北部化」でした。つまり「より巧妙な差別」でした。そのような傾向は、衰退する北部の「フロストベルト」ないし「ラストベルト」から軍需産業を中心に経済的に興隆する南部の「サンベルト」への人口移動と相俟って顕著になりますが、保守的な高学歴の新参者は「長い市民権運動」の成果、例えば「バス通学」命令による「人種共学」^{インテグレーション}の実験の継続に反発します [Kawashima 1997]。1970年代後半以降の最高裁による一連の逆転判決に結び付く提訴の原告は彼らでした。さらには「シェルビー郡」判決 (2013年) で市民権運動がもたらした最大の成果とされる投票権法も事実上かなり骨抜きとされました。こうしてキング牧師に率いられた各地の地元黒人民衆と全国の心ある人々の共闘でもたらされた「第二次再建」は終焉を迎え、トランプ政権の誕生によって反動派による「第二次復権」の時代が本格化しつつある今、判事の三分の二が保守化した連邦最高裁がその流れを牽引しています。まさにかつてアーサー・シュレジンジャーが指摘した「アメリカ史のサイクル」が実証されるかのような反動化です [川島 2023a; Schlesinger 1986]。

4. オバマ政権の誕生と反動的草の根運動としての「第二次復権」

(1) バラク・オバマとの個人的な出会い

ここでオバマ政権の誕生がもたらした負の側面、つまり反動的な草の根運動の組織化と高揚、さらには「第二次復権」の流れについてお話しします。後ほど写真をお見せしますが、シカゴ大学教授時代にオバマを知っていたハーヴァード大学のウィリアム・ウィルソン (William Julius Wilson) 教授から紹介されて、まだほとんど無名時代のオバマと対話したのは2002年8月30日で、彼は弁護士をしながら州上院議員を務めていました。印象に残るのは「誰が最も手ごわい相手でしたか」という問いに対する彼の「ブラック・パワー政治家です」という意外な回答でした。多分連邦下院議員候補予備選挙で元ブラック・パンサー党員のボビー・ラッシュ (Bobby Rush) に敗北した経

験を指しているのでしょうけど、かなり衝撃的な言葉でした。他に彼との対話で記憶に残るのは尋常ならざるオーラと言うべき魅力と知性溢れる言動でした。さらには彼の父の国であるケニアを訪れた際の部族争いという独立後の不都合な真実について彼が知った折のショックの大きさと多文化主義的信念の深化でした。また「大学入学のためにハワイを後にしてカリフォルニアに上陸して初めて自分が『黒人』であると知った」という事実も報告者にとっては衝撃でした。社会的構築物としての「人種」の根強さはアメリカ独特のものであると報告者は再認識させられた次第です。オバマ氏は当初の「30分だけ」という約束の時間を超えて倍の1時間も付き合ってくれました [付録1: (6) ②; 川島 2003a]。

(2) ^{マス・インカーセレーション}「大量収監」と^{プリズン・インダストリー}「監獄産業」隆盛下で高まる^{ポストレイシヤル}「人種差別克服」時代への期待

オバマ政権一期目の2010年代初頭に学術書としては珍しくベストセラー化した書物にミシュエル・アレグザンダーの『ニュー・ジム・クロウ』があります [Alexander 2012]。同書によって黒人男性を主たるターゲットとした「大量収監」現象と公共事業化された「監獄ビジネス」の隆盛が問題化しました。そのような警察強化の方針を打ち立てたのは1990年代に二期8年続いたクリントン政権でした。警察強化の方針は多発する犯罪取締りの事実上の例外とされてきた黒人ゲッターの住民の多くが望んだ政策という側面もあったのですが、2000年代初頭のブッシュ（息子）政権下で「麻薬取締り」の名の下に「大量収監」の政策が本格化しました。先にご紹介したシカゴのウェストサイドのノースローンデイルでは街路を歩く黒人男性の4人のうち3人が刑務所帰らない刑務所に送られる犯罪者予備軍であるとされ、「監獄産業」が有望な公共事業として民営化されて隆盛する時代を迎えたのです。クリントン政権が進めたのはアメリカの歴史的な多様性はアメリカの弱点ではなく長所であり経済的繁栄の原動力だとする多文化主義の礼賛に基づく政策でした。1965年の移民法改正で増加傾向にあった非白人系新移民がさらに増え、「過去の差別への補償」というアフターマティヴ・アクションの当初目的は忘れ去られます [川島 2014: 第8章]。

二期続いた「黒人初の大統領」の誕生は「ポストレイシヤル・アメリカ」の声を高めました。報告者は当時英語で書籍出版を画策して有名出版社の査読まで進めることができましたが、その折に5名の査読者のうちの最も厳しい判定には「黒人が二期も大統領を務めるアメリカで人種差別に関する書物は不要であり、売れるわけがない」という一文があったのを覚えています。そのような情状下で放置され続けたのが「アンダークラス」と呼ばれる、職探しの意欲すら喪失し、失業率の分母となる「労働力」からさえ抜け落ちたゲッターの最貧困層の増加でした。その後にはトランプ政権の誕生を支えたとされる「ラストベルト」の職を失った白人の下層民が「労働者階級」と呼ばれるのと対比しますと、「白人失業者は求職中だが、黒人下層民は働く意欲を喪失している」という前提に基づく偏見と差別の残存が拭えません。ついでに申しますと、アメリカの文脈では主に高齢者を対象とする「社会保障」は白人用とされ、貧困者、特に母子家庭を対象とする「社会福祉」は黒人ゲッター住民用であるとして「人種」で区別して婉曲語法的に使用される傾向が否めません [川島 2015]。

(3) ^{ティーパーティー}「茶会」運動の拡大浸透からトランプ政権の誕生へ

繰り返しになりますが、オバマ政権の誕生は反動派の結束を刺激します。当初は郊外からさらに奥地へと引きこもった中高年の白人を中心とする文字通りの「茶会」の穏健な定期的催しが運動の中心でしたが、トランプ政権の誕生と共に、あからさまな白人至上主義を掲げる過激な武装集団で

ある民兵組織が次第に目立つようになります。その結果として民主党のバイデン（Joe Biden）候補（当時）の勝利を否定する2021年1月6日の衝撃的な連邦議会武装襲撃事件が起こるのです。まさに1910年代における革新主義の隆盛後の1920年代に主に南部以外で第二次KKKが隆盛した事実象徴される反動的動きが表面化した歴史が繰り返されたのです。それはBLM運動の世界的支持に裏打ちされた高揚によるバイデン政権の誕生後も死滅したわけではなく、リンダ・ゴードンが極めて悲観的に予見した如く、第二次KKKの隆盛を模範としたナチズムが初期において弾圧された後に再生強化されたように、アメリカで起こると懸念される反動的揺り戻しと内戦の連鎖が世界に波及し人類は破滅の淵に向かうかもしれません〔Gordon 2017〕。

(4) 「ウォール街占拠」運動の世界的な拡散高揚とオバマ政権による弾圧

オバマ政権のより本質的な負の側面にも触れる必要があります。それはおそらく聴衆の皆さんの記憶にも残っているであろう2011年秋に突如「99%の人々の声」を代弁して起こり、世界各地にも波及した「ウォール街占拠」運動がなぜ瞬く間に沈静化したのか、という疑問です。本報告者はその原因の一端を、翌年に再選の選挙を控えたオバマ政権による断固とした弾圧にあったと推測しております。国家財源の大規模投入による金融制度の再生を一応達成したオバマ政権は既に財界からの支持の根拠を失っており、再選は相当難しくなっていました。詳述は避けませんが、2012年秋の選挙ではアメリカ主要各紙の予定原稿は「ミット・ロムニー（William Mitt Romney）の勝利」を前提に準備されており、オバマ再選の予測が明確化するにつれ、記者たちは慌てて別原稿を執筆したそうです〔川島 2018〕。

(5) 非白人移民の急増下での「第二次ロス暴動」と「^{モデル・マイノリティ}模範的少数派」の礼賛

「長い市民権運動」の時代の終焉以降に顕著になるのが非白人系新移民の急増です。今やアメリカの外国生まれ人口は4800万人と推定され、彼らの第二世代の被扶養若年人口を加えれば6500万人で、総人口3億3000万人の約2割を占めます。「模範的少数派」として囃されるアジア系移民ですが、日本で医師をしていて芽が出ず、2年程前に意を決して渡米して現在オハイオ州のクリーヴランド・クリニックで医師ではなく研究者として驚くほど低賃金で雇われて働く報告者の長男夫婦の現状を見ますと、アメリカが歴史的に意欲溢れる能力の高い世界中の優秀な労働人材を集めては低賃金で搾取し続けて好景気を維持してきたという独立以来の長期的傾向は終わるところか強化されている現状を実感します。グローバル化が促進した非白人系移民が白人労働者階級を圧迫する事実は否定し難いのですが、「第二次ロス暴動」（1992年4月29日～5月4日）における韓国系商店主と黒人住民との銃撃戦に象徴されるように、非白人系新移民が大都市ゲットー黒人下層民との対立状況の最前線に追いつまれている現状は、かつて前世紀初頭のゲットー形成期以来「新移民」と呼ばれた東欧ユダヤ系が同じくゲットーの商店主になって「暴徒」の略奪のターゲットとされてきた事実の繰り返しにすぎないとも言えます。この意味でも「歴史は繰り返す」と言えます。このような歴史的文脈への深い理解を欠いていると疑われる直近のアファーマティヴ・アクション違憲訴訟の原告団にアジア系若年世代が加わった事実を前に、報告者は極めて深い憂慮を禁じえません。彼らは「弱者同士」が闘わされる歴史的構造の維持に動員され、長期的には自己利益も損なう結果を自ら招いているのです〔川島 2014：第6章〕。

5. 市民権運動の時代以降における「人種統合」^{インテグレーション}の意味の変遷

(1) 「ブラウン」裁判原告団の黒人の親たちが当初求めたのは何か

ここで「人種統合」の意味の変化について言及します。そもそも「長い市民権運動」の歴史の転換点となった「ブラウン」判決をもたらすことになる原告団を構成した黒人の親たちが当初求めたのは「人種隔離教育の廃止」という革命的な変化というよりも、1896年に連邦最高裁が「ブレッシー」判決で命じた「平等な分離」という、あくまでも現状の改善でした。ただし、長年の失望の蓄積によって、白人との「人種統合」を求めない限り教育の質的な改善は得られない、黒人の子どもをよい設備と優秀な教員が集中する白人学校に通わせるだけでなく、白人の子どもを「人質」として劣悪な黒人学校に通わせる「バス通学」命令による学区内の全学校の「人種割合の均衡化」を実行させることでしか当初目標の実現は図れないことを経験的に知っていたからです。その結果は大都市中心部からの「白人の逃亡」であり、結局のところ大都市中心部のほぼ全ての公立学校が黒人その他の少数派生徒のみとなり、郊外に所在する白人のみの学校との間での学区を超えた「バス通学」命令は僅差で違憲とされ、自治体の枠を超えた大都圏レベルで「人種」の住み分けが進行します。今日のグローバル化と大都市中心部の再開発の波で高学歴の白人若年世帯の都心部回帰傾向が見られますが、鍵付きゲートで囲まれた都心部の高級化住宅団地に閉じ籠る「ジェントリー」がどこまでゲッターの問題を共有できるか、見通しはそれほど明るくありません [川島 2021b]。

そのような中で「人種統合」の再定義がなされつつあります。それは生徒や先生の「人種割合の均衡」から「教育の質の保障」の実現、端的に言えば「教育困難地区」学校への傾斜予算配分、つまりは教育予算のアファーマティヴ・アクションの要求です。ただし、財政面でも地方自治の伝統が強く残るアメリカで財政破綻の危機にさらされつつある大都市圏中心部自治体でどこまで実現可能か、楽観はできないと言わざるを得ません [Johnson 2019]。

(2) 最晩年のキング牧師における主張の変化の真意

ここで再び三十代後半で早すぎる晩年を迎えたキング牧師に焦点を当てます。彼の主張が「人種平等」から「経済的正義」に移行した事実の解釈について考察します。報告者を含めた市民権運動史家の従来の一般的な理解では、この変化をキング牧師率いる市民権運動主流派における階級闘争志向の急進化を象徴するものと見なされてきましたが、報告者には逆に理想主義から現実主義への方針転換であったように思われます。つまりシカゴでの「住宅開放」の闘争に敗れ、幻滅し、むしろ既述のリチャード・バーネット氏のように、ゲッターそれ自体の改善努力を目指すために、住宅や教育といった環境改善のための予算の傾斜配分や就業保障といった、より現実的な改善要求への舵の切り替えです。キング牧師の「最後の聖戦」の端緒となる筈だったメンフィスの清掃労働者によるスト支援の最中に彼は暗殺されるのですが、この「貧者の行進」の目標は「経済的正義」要求、つまり経済面での「統合」であり、必ずしも居住区や教室内の「人種統合」ではなかったのです。それはある意味で、高揚する「ブラック・パワー」のスローガンと軌を一にする運動目標の現実的修正でもありました [Honey 2007]。

上述のようなキング牧師における「人種統合」の意味の変化は運動目標の急進化というよりも、かなりの程度において現実主義への路線変更であったのですが、それを実現するために不可欠な「人種」を超えた政治的な連帯を達成する努力の最中にキング牧師、そして続いて彼と歩調を合わせて

ベトナムからの撤退と貧困対策の強化を表明していた有力大統領候補のロバート・ケネディが相次いで殺され、最後の首都ワシントンまでも巻き込んだ「暴力の季節」は戒厳令の下で出動した連邦軍による暴力的鎮圧で幕を下ろされ、「貧者の行進」を象徴した「復活の都市」と名付けられた抗議活動参加者のキャンプ村も惨めにもブルドーザーで破壊され、民主党大会では現職のハンフリー副大統領が候補指名を受けて運動を支えてきた若者たちの多くは失望し、投票ボイコットが叫ばれました。丁度トランプ政権が誕生した2017年の7月に、かつて全共闘世代のバイブルの一つとされた『いちご白書』[Kunen 1969]の原作者であるジェームズ・クネン (James Kunen) 氏が名古屋市立大学で講演した時に、自分の息子さんがかつての父親と同じく2016年秋の選挙での「絶望」を語り、選挙のボイコットを叫んで結果的に反動的な政権を生んでしまった折に、1968年の選挙における自身のボイコットの誤りに気づいたが、既に手遅れだったという後悔に満ちた「歴史は繰り返す」という感慨深いお話をお聞きしました。報告者が思うに、BLM運動の高揚とトランプ再選阻止の背景にはこのような反省があったのではないのでしょうか。

(3) 誰が「60年代」の一番の勝利者／受益者なのか

ところで「激動の60年代」の受益者は誰だったのでしょうか。黒人の上流階級という意見があります。また例えば若手大学教員の採用の多くが白人女性であるばかりか、アフーマティヴ・アクションの適用外だったウェイトレスの大半も従来と同様に白人女性のままです。冒頭で触れた黒人女性政治家の活躍も含めかなりの程度において「人種」を超えて女性が恩恵を受ける傾向が目立つのは事実です。その一方で、非白人系の専門職者においても同等レベルの白人と比較した所得格差は解消されず、先に触れた報告者の長男夫婦の事例のように、就労ヴィザや医師免許の取得に壁を設けて優秀で従順な外国人労働力を安価に雇用しながら一番うまく利用しているのは有力投資ファンドであり、彼らはゲットー住民を食物にしたサブプライム・ローンで大儲けし、その破綻の後始末も「黒人初の大統領」の下で連邦予算によってなされたのですから、やはり資本家が一番の受益者というべきであろうと思います。「ウォール街占拠」運動の高揚と世界的波及で一時的に危機を迎えた彼らを救ったのもオバマ政権であったのは何とも皮肉です [川島 2018]。

しかしながら、このような世界資本主義体制の批判は簡単ではありません。間もなく報告者も仲間入りする年金生活者や介護保険などの高齢者用基金もそのような大手投資ファンドの大儲けのお零れに預かっており、この資本主義という構造をただ闇雲に破壊することを政治的な連帯の中心目標に据えるのは非現実的です。不屈の闘志を堅持して地道で粘り強く現状の改革と改善を重ねながら、日常的レベルで国際的な連帯の輪を広げることを図るのが唯一の選択肢です。

(4) ボストンでの「バス通学」命令論争現地調査で気づいた日本人研究者の貢献可能性

この章の最後に30年近く前のボストンでの「バス通学」命令に関わる現地滞在研究の経験を通して、日本人研究者としての弱点と利点、そして貢献の可能性について触れます。日本人研究者が言わば「アメリカの恥部」と言うべき「人種」に関わる現地調査、とりわけインタビューをする際には、「被害者」と「加害者」の双方からかなりの抵抗に遭うことを覚悟する必要があります。「日本にだって研究すべき課題があるだろう」というような反発の言葉を何度も浴びせられました。その度に報告者は「日本人にとって日本の問題は当事者なので、完全に中立的になり難いので、ぜひ日本に来て頂いて日本のことを研究して下さい。その際は応援しますので、今回は私にご協力下さい」と答えることにしました。互恵的意識が強いアメリカでこの屁理屈はある程度功を奏しました

[Kawashima 1997; 川島 2015]。

さらには後で詳述しますが、お話を伺ううちに従来語られてこなかった、隠された真実に類する事実について進んで語って頂ける機会にも何度か巡り合うことができました。それと同時に、当事者にとって不都合な真実に類する事実の吐露が連鎖的に帰結する責任についても次第に自覚されるようになりました。それは年老いた当事者たちの遺言のような、重みのある言葉であり、歴史家として後世に伝える義務を強いられるような威力もありました。今ようやく報告者はそのような責任を果たす機会を得たという思いがしております。

6. 「被害者」強調の自画像を抜け出して政治的な連帯志向へ

(1) 「アイデンティティ」を超えた「共通利益」の模索へ

最後に報告者自身の遺言めいた教訓を語らせて下さい。少々問題ありと思われかねませんが、敢えて言及する次第です。著名な文化史家で評価の高い『ポストエスニック・アメリカ』の著者であるデイヴィッド・ホリンガーは、オバマ政権の誕生で浮き立つリベラル派が声高に叫ぶ「ポストレイシャル・アメリカの到来」というアメリカの「人種」をめぐる楽観論に満ちた時代の雰囲気に対し、戒めるように、少数派諸集団の分断化に結び付くことが多々あり、自身で変え難い生得的な出自に基づく「アイデンティティ」の政治にまつわる呪縛から真に解き放たれる術として、経済的な共通利益を中心とした「連帯」の根拠の模索とその実現こそが真の「ポストエスニック」ないし「ポストレイシャル」の立脚点であると強調しています。とりわけ黒人や日系人のように、歴史的に法律の強制を伴った差別の被害者の子孫が抱え続ける問題の解決を、1965年以降の非白人系の新たな移民集団の言う「アイデンティティの尊重」を超えた国家的課題として位置付けるべきであると強調されます [Hollinger 2000; Hollinger 2011]。

推移する政治・経済・社会情況のうちでもとりわけ看過しえないのは、韓国系社会学者のジェニファー・リーが見出した、新たな政治的対立軸として、従来の「白人」対「非白人」に代わって、「黒人」対「非黒人」という分断の軸が政治と社会の両分野で生み出されつつあるという指摘です。2040年代半ばには白人がアメリカで史上初めて多数派の地位を追われることが確実視されています。個人的に勝手な解釈をすれば、かつての欧州系の「新移民」をやがて「白人」という新たな括りで旧来の主流派が新たな多数派工作を図ったように、「アンダークラス」や「監獄ビジネス」の犠牲者を不釣り合いに多く含むアフリカ系アメリカ人を「過剰な既得権者」とする一方で、一部の黒い肌の新移民を含む「模範的少数派」の称賛を伴った「非黒人」という新たな括りに基づく21世紀版の多数派形成工作が現在進行しているというわけです。主に人為的な「出自に基づくアイデンティティ」の創出の政治と軌を一にした多様性の礼賛傾向に対して、主に経済分野における共通の利害の気づきに基づいて、より住みやすく、より安心して生活できる未来社会を目指す革新主義的伝統に即した連帯志向の政治連合の形成を呼びかける先のホリンガーの提起を真剣に再考すべきではないかと思う次第です [Lee & Bean 2010]。

(2) 初期アメリカ経済の自力発展^{ティクオフ}に貢献した奴隷制と偏見の歴史性

オバマが「最も手ごわい相手」と吐露した排他的傾向を否認ない「ブラック・パワー」の思想を受け継ぐ黒人政治家主流派には問題がないと言えるのでしょうか。報告者が取り上げるのは4年前

に公表され称賛の一方で物議も醸した「1619年プロジェクト」です [Hanna-Jones 2021]。ここではその意義を踏まえつつも、看過しえない問題性についても勇気をもって指摘したいと思います。メイフラワー号の到着の1年前に奴隷としてヴァージニアに上陸した黒人たちに始まる彼ら彼女らの苦難の歴史を思い起こすことの重要性に関しては今更言を俟ちませんが、同時に「被害者」としての側面を専ら強調するこのプロジェクトが実質的に無視する、「人種」が社会的に十分に構築される以前の植民地初期ヴァージニアの歴史に関してエドモンド・モーガンが掘り起こした「ベーコンの反乱」(1676年)で見られた当初からの階級的な下層民による連帯の試みの歴史について、全否定する以前にそもそもそのような事実を眼中に置かないという態度がもたらす一種の政治性を否定し難い傾向の問題性について報告者は看過しえません。多くの歴史家の賛同を得たホールによる「長い市民権運動」の提起で強調されるのも、戦後冷戦下で開花する素朴な人権思想に裏打ちされた労働の場を主とする「人種」を超えた経済的な共通利害に基づく階級的連帯の試みの歴史を掘起こすことです。かつての南部人民党による「ポピュリズム」は「第一次再建」の時代の閉幕とジム・クロウの時代の開幕を画した一方で、「第二次再建」はまさにこのような「長い市民権運動」による階級的連帯がもたらした成果なのです。またトランプズムの高揚で表面化した、既述の白人優越主義というとりわけ南部の「経路依存症」ですが、私見によればそれが堅固に確立されるのは奴隷制下ではなく、むしろ19世紀末から20世紀初頭にかけての黒人に対する隔離と選挙権剥奪という差別体制の成立、さらには白人女性を「被害者」とする一方で黒人男性を「加害者」として標的にした、大衆娯楽化された定期的な見世物的リンチの横行が制度化する前世紀初頭以降の比較的現代に近い時期です。それは自然発生したというよりも、「人種」を超えた階級連帯を志向した人民党の政治運動が弾圧される過程で「ブルボン階級」による、中下層白人への締め付けと妥協の両面を含む、極めて意図的な政治の産物です。これが現在の南部における白人至上主義的な「経路依存症」をもたらしている初期設定であり、それはかつて第二次KKKによって当時「新移民」排斥に揺れる北部や西海岸諸州にも波及したのであり、トランプズムの隆盛で今また全国化しているので [中野 2023; Morgan 1975; 加藤 2023]。

(3) 「貢献」の相互承認による「被害」を競い合う^{トライバリズム}種族主義の克服の可能性

黒人が歴史的な「被害」を強調するのは当然のこととして理解しうのですが、ニクソン政権以降半世紀以上続けられた「アフーマティヴ・アクション」が呼び起こした所謂「逆差別」による「被害者」という自画像を白人男性のみならずアジア系によっても共有されつつあるという昨今の事態は極めて憂慮すべき現象です。一時期話題となったハーヴァード大学法科大学院のチャールズ・オグルトゥリー (Charles A. Ogletree) 教授が中心となって進められた奴隷制の賠償請求運動も停滞を余儀なくされ、とりわけ彼が主張した最大の被害者のままであり続ける「アンダークラス」の救済による「社会的修復」としての賠償 (reparation) を求める提案は大変に理にかなっており、説得的でもあります。オバマ政権下にあっても全く顧みられませんでした。むしろ後ほど詳述するように、奴隷制が果たした初期アメリカの発展の基礎固めにおける貢献の度合い (= 相互依存性) を強調する歴史的文脈を提示する方が「アイデンティティ」を超えた裾野の広い連帯の政治の構築にとってより可能性が高いと思います [川島 2014a; Beckert 2014; 付録2: グラフ2, グラフ3]。

(4) 「開かれた相互依存主義」と自立権の保障に向けて

前項に関連して、二大政党制の下で最大の対立軸となる「政府の責任」と「自己責任」をめぐる

論争に関して私見を申し上げます。報告者は、本来的には少なくとも全ての歴史的被害者においても最終段階での「自助努力」の不可避性は否定し難いのではないかと、経験的に思っております。この意味において、本来的に基本的には自己責任こそが社会の原則であることは否定し難いと確信します。また「普遍的人権」には「自立（≡開かれた依存関係を樹立）する権利」も含まれていると考えられます。問題は様々な所与としての条件や事情から自己責任を実行し難い、ないし自立を阻まれている人が多く存在しているという現実があることです。このような現実を踏まえ、政府を含めた共同体の責任とは普遍的自立権を全ての人に保障するという事ではないでしょうか。アメリカにおける「長い市民権運動」とその後の混迷の歴史を顧みること、このような「自立保障」（≡広く人々に開かれた依存関係を確立できるように公的／民間機関が援助する）をキーワードとする新たな人権観の模索が望まれていると同時に、これまで以上に世界規模での基本的人権擁護原則浸透の推進役にアメリカがなり続けるために我が国が積極的に支援するという意味での、既述のアントニオ・ネグリの言うところの「反米主義から親米主義への転換」の必要性を確信するに至った次第です〔佐藤 2023；井筒 2022；「新しい民主主義へ」2012〕。

おわりに——超大国アメリカの世界的覇権衰退期に抱く個人的感慨

(1) オール・ライヴズ・マター A L M ではなく ブラック・ライヴズ・マター B L M が「人種」を超えてアメリカ人の心に届いた理由

一見してより道徳的に正しい ALM ではなく、BLM がより多くのアメリカ人の心に届き、公開処刑の執行人のような白人警官による黒人中年男性の殺害場面の動画を含む SNS による拡散の効果で世界規模で支持の枠の広がりが見られ、それは排外主義的な前政権の少なくとも一時的な後退をもたらしました。ところがロシアによる信じ難いウクライナ侵略戦争の長期化と莫大な支援へのアメリカの国民的疲労感が高まる中で、反動的で利己的な前大統領の再出馬を支援する勢力が勢いを増しています。仮に好ましい世界秩序の回復に尽力し続ける候補が当選したとしても、もし前回選挙後の反動的熱狂の再現が起これば、アメリカは「第二の内戦」の危機にさらされるかもしれません。バーバラ・ウォルターズが指摘するように、それはかつての南北戦争のような地域的なものとは異なった、より複雑で連邦政府による鎮圧的対応がほとんど不可能な、各地で同時に起こる国民的な分断を伴う武力蜂起になることが危惧されています。アメリカの覇権の崩壊は単なるアメリカ帝国主義の終わりでは済まされない混乱と破壊を世界的に、そしてこの太平洋の西岸地域にも連鎖的にもたらすでしょう〔川島 2021a；Walters 2022〕。

(2) 「被害」強調戦略から「貢献」強調による階級的な連帯を復活させる戦略へ

先にも触れた「被害者」意識強調戦略から「貢献度」の競争への転換を提案する上で裏付けとなる、奴隷制がもたらした初期アメリカの発展への貢献という事実に関しては後ほどまとめて歴史統計的グラフと共に詳述します。先に確認したように、「長い市民権運動」史観や多文化主義的な「承認」を要求する運動と「再配分」を求める階級闘争をめぐる論争の根幹にある看過しえない勇気づけられる歴史的事例は「世界の 99% の人々による連帯」を主張して瞬く間にグローバル化した「ウォール街占拠」運動です。それは確かにオバマ再選のために犠牲とされて瞬時に鎮圧されたのですが、このような階級的連帯意識を地道に醸成することこそが「第三次再建」につながる確実な道であろうと確信する次第です〔付録 2：グラフ 2，グラフ 3；川島 2018〕。

(3) 「第三次再建」を展望する前提となる三つの新現象への対応

本報告の締めくくりとして「第三次再建」の展望について述べます。ミシガン大学法科大学院のリチャード・プリマス教授の指摘によれば「第二次再建」の遂行を可能とした第二次世界大戦と冷戦という時代背景と比べた現状との大きな違いは、次のような三つの前提の変化であるとされています。第一にジェンダーとLGBT & Qに関わる承認要求政治の世界的な高まりで、第二にグローバル化の副産物としての世界的な経済的格差の拡大傾向、そして第三に非白人系移民の急増に伴って揺らいだ「人種」の定義とそれに基づく従来の「アフーマティブ・アクション」に対する違憲判決による「人種に基づく優遇策」の行き詰まりの三つです。要するに「多様性の承認」か、それとも「格差是正の再配分」か、をめぐる政治哲学者の論争が象徴する時代背景の変化と重なります。この問題は簡単には解き難いのですが、トランプズムの高揚を支える「反動派」と一括りにされる諸勢力を構成するのがどのような人々なのかを再確認することで手がかりが得られるかもしれません [Primus 2016]。

(4) 市民権運動の時代以降に顕在化するアメリカ的覇権衰退の二面性

やや誤解を招くかもしれませんが、先に紹介したアントニオ・ネグリによる「反米」から「親米」への転換の勧めに報告者は大いに共感を覚えます。丁度一年後に本選挙を迎える大統領選挙へ向けて、従来のアメリカではあり得なかったほどの物議を醸しながら人気を高めて復活しそうな勢いを見せている前大統領が掲げる「アメリカ第一主義」は、経済的二極化の犠牲者と自己認識する白人労働者階級の苦境を軽視してきた一方でマイノリティ諸集団を「不当に擁護してきた」とされるエリート層への不満を煽らせていた「ラストベルト」の白人労働者階級の怒りに火をつけ、彼ら彼女らの不満が内包していた「市民権運動時代のアメリカ」が不十分ながら達成したものへの批判と結び付け、1960年代後半に高揚した先例を上回るような排外主義的分断を国民に煽っています [Hochschild 2016; Vance 2016]。「文革世代」の末席に連なる1955年生まれ^{しゅったい}の報告者にとって「アメリカ帝国主義」と同義の「アメリカの世界覇権」の衰退はかつてなら歓迎すべきなのかもしれませんが、第三次世界大戦への危惧が現実化しつつある悪夢のような現在の世界情勢を出来させたのがアメリカの覇権の衰退である事実を看過できません。裏を返せば「市民権運動時代のアメリカ」が実現したのはアメリカ的覇権の絶頂期でした。末尾に付した大恐慌下の1930年代から二度目の世界戦争を経て確立されるアメリカの覇権が70年代以降に衰微して現在に至るまでの前年比経済成長率と失業率の反相関関係を示すグラフを見れば、大恐慌を本格的に抜け出すためにはリベラルなニューディール政策では不十分で、二度目の世界戦争による大規模な軍事支出が必要であり、戦後の持続的好景気が朝鮮半島やインドシナ半島での大規模な戦争の下で続き、それは持続的な高度成長をもたらし、「市民権運動の時代」をもたらす前提を作ったのです。アメリカ的覇権の確立と持続の努力には二面性があることを認めねばなりません。確かに「好戦の共和国」と批判されても仕方のない忌むべき帝国主義的側面がもたらされただけでなく、その膨大な軍事支出と表裏の持続的高度成長経済こそが、広く市民に理想実現への期待と自信を抱かせ、大規模な財政支出による貧困対策を伴う「市民権運動の時代」をもたらしたのです [油井 2008; Patterson 1996]。その達成が不十分であったのは事実ですが、トランプズムの高揚下でそれすら全否定されるに至る現在までの「長い反動化」と言うべき時代がアメリカの覇権の衰退期と重なり、「世界の警察官」として世界戦争に至る危険性のある軍事的な現状変更をもくろむ意図を未然または小規模に防いだのも事実であり、「民兵」^{ミリシア}の伝統に見られる「好戦性」が、2021年1月6日の連邦議会襲撃事件に見られた

ように、リベラル派やマイノリティなど「内部の敵」に向かいかねない現実を眼前にすると、アントニオ・ネグリの勧め「親米主義」の真意を、アメリカの覇権の好ましき側面の復活を促すことにあると理解すれば、大いにネグリの「親米主義」に共鳴しうるのはです〔Hardt & Negri 2001; Piketty 2014; 「新しい民主主義へ」 2012; 付録 2 グラフ 1; 中野 2024〕。

(5) 言葉を越えた音楽がもたらす共感の醸成への極めて個人的経験

最後に外国地域研究で不可欠な対象地域の文化や歴史を研究者自身が内面化する努力において、ご参考になると思われる報告者自身によるアメリカ大衆音楽に関する極めて個人的な経験について、拙いギター演奏も交えつつお話させて下さい〔川島 2019〕。ひとまずここまでのご清聴に感謝します³⁾。

参考文献（本文中に引用はないが参照に値するものも含む）

【邦語文献】

「新しい民主主義へ（アントニオ・ネグリへのインタビュー）」2012『朝日新聞』2012年1月4日。

藤原帰一 2002『デモクラシーの帝国——アメリカ・戦争・現代世界』岩波書店。

ギンズバーク、アビー監督映画作品 2020『権力を恐れず真実を——米国下院議員 バーバラ・リーの闘い』Ginzberg Productions。

加藤紗織 2023「アラバマ州における選挙権剥奪の歴史過程に関する一考察（1819-1915年）：ジム・クロー体制の確立と階級闘争の解消過程に焦点を当てて」（南山大学国際地域文化研究科 2022年度学位博士（地域研究）請求論文（南山大学図書館の「機関リポジトリ」でダウンロード可）。

川島正樹 1992「モントゴメリーは公民権運動の出発点たりうるか？——モントゴメリー・バス・ボイコットの生成・発展過程の再検討」、『アメリカ史研究』, 15号, pp. 29-43。

——— 1994「1965年夏以降のM・L・キング——FBI秘密ファイルの再検討を中心に」、『歴史評論』, 531号, pp. 19-34。

——— 2003『現地聞き取り調査を主要方法とする米国公民権運動史研究（平成13～14年度科学研究費補助金基盤研究C—2 研究報告書 研究課題番号13610462）』（南山大学アメリカ研究センター蔵）。

——— 2008『アメリカ 市民権運動の歴史——連鎖する地域闘争と合衆国社会』名古屋大学出版会。

——— 2012「『アメリカの褐色化』に関する諸議論をめぐって——新移民の大量流入とオバマ政権を誕生させた米国社会の背景的变化の分析」、『アカデミア（社会科学編）』, 4号, pp. 91-109。

——— 2014a「社会運動の契機を模索するアフリカ系アメリカ人の苦闘——ポスト冷戦期における賠償請求と歴史認識問題を中心に」、『アメリカ史研究』, 37号, pp. 4-23。

——— 2014b『アフーマティヴ・アクションの行方——過去と未来と向き合うアメリカ』名古屋大学出版会。

——— 2015「日本人研究者は欧米地域研究分野でどのような貢献をなしうるか？——ひとりの日本人米国社会運動史家による自らの仕事の意義を自問するささやかな試み」、『南山大学大学院国際地域文化研究』, 第10号,

3) 本稿著者がギター演奏を行った曲は、黒人系の音楽としてはブルース・ギタリストとして名高いMuddy Watersのブルース系のソロ曲とニューオリンズ系ジャズの代表の一人である管楽器奏者Sidney Bechetの曲のギターのためのアレンジ曲、白人系音楽としてはChet Atkinsの“Mr. Sandman”とブルー・グラス系の歌曲“Kentucky Waltz”および盲目の天才的ギタリストとして著名なDoc Watsonのギター・ソロ曲である“Black Mountain Rag”で、最後の締めとしてカントリーの巨匠Jonny Cashとソウルの大御所Ray Charlesが両音楽の融合を試みてマスターテープまで録ったものの発売は死後となってベストセラーとなった三拍子のゴスペル“Why Me Lord”を参加者全員で斉唱して会を閉じた。

- pp. 141-150。
- 2018 「第2章 貧者の行進からウォール街占拠へ——1968年のアメリカ社会運動と現在への影響」, 藤本博編 『「1968年」再訪——時代の転換期の解剖』, 行路社, pp. 33-58。
- 2019 「アメリカ大衆音楽と『人種』の陰影——ソウル, カントリー, そしてフォークをめぐる歴史的素描の試み」, 『アカデミア (社会科学編)』, 17号, pp. 1-29。
- 2020 「^{ブラック・ライヴス・ムーブメント} B L M 運動が示す希望——米国分断の歴史に次世代が風穴」『中日新聞(夕刊)』2020年10月9日。
- 2021a 「^{ブラック・ライヴス・ムーブメント} B L M 運動の歴史的背景を探る試み——資産格差・住宅隔離・学校再隔離に関する近年のアメリカにおける研究動向の分析」, 『アカデミア (社会科学編)』, 21号, pp. 1-39。
- 2021b 「第七章「社会的構築物としての人種」概念に基づく通史的展望の意義——五つの設問を媒介に駆け足でアメリカ史を概観する試み」, 岩本裕子他編著, 『自由と解放を求める人びと——アメリカ黒人の闘争と多面的な連携の歴史』, 彩流社。
- 2023a 「米国最高裁判決と「人種」——奴隷制廃止と市民権・学校統合と住宅隔離・投票権をめぐる攻防」, 『アメリカ研究』, 57号, pp. 79-104。
- 2023b 「歴史は物語りではないのか——アメリカ地域研究系歴史家による歴史哲学への接近の試み」, 『アカデミア (社会科学編)』, 25号, pp. 1-24。
- 川島正樹編著 2005 『アメリカニズムと「人種」』名古屋大学出版会。
- ラグラベネーズ, リチャード監督映画作品 2007 『フリーダム・ライターズ』, パラマウント映画。
- 三牧聖子 2020 「5. ステイシー・エイブラムス」, 和泉真澄他編著, 『私たちが声を上げるとき——アメリカを変えた10の問い』, 集英社。
- 中野耕太郎 2023 「ポスト・トゥルース時代の歴史認識——米国「歴史戦争」から一六一九年プロジェクト論争へ」, 『歴史評論』, 878号, pp. 19-34。
- 中野博文 2024 『暴力とポピュリズムのアメリカ史——ミリシアがもたらす分断』, 岩波書店。
- 佐藤仁 2023 『争わない社会——「開かれた依存関係」をつくる』, NHK出版。
- 筒井清輝 2022 『人権と国家——理念の力と国際政治の現実』, 岩波書店。
- 油井大三郎 2008 『好戦の共和国アメリカ——戦争の記憶をたどる』, 岩波書店。
- 渡辺靖 2020 『白人ナショナリズム——アメリカを揺るがす「文化的反動」』, 中央公論社。

【英語文献】

- Acharya, Avid, et al., 2020 *Deep Roots: How Slavery Still Shapes Southern Politics*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Alexander, Michelle, 2012 *The New Jim Crow: Mass Incarceration in the Age of Colorblindness*, rev. ed. New York: New Press.
- Beckert, Swen, 2014 *Empire of Cotton: A Global History*. New York: A. A. Knopf (ベッカート, スヴェン 2022 『綿の帝国——グローバル資本主義はいかに生まれたか』 鬼澤忍他訳 紀伊國屋書店)。
- Fraser, Nancy, 2022 *Cannibal Capitalism: How Our System Is Devouring Democracy, Care, and the Planet —— and What We Can Do about It*. London, UK and New York: Verso Books (フレイザー, ナンシー 2023 『資本主義は私たちをなぜ幸せにしないのか』 江口泰子訳 筑摩書房)。
- Fraser, Nancy, and Axel Honneth, 2003 *Redistribution or Recognition?: A Political-Philosophical Exchange*. New York: Verso (フレイザー, ナンシー, アクセル・ホネット 2012 『再配分か承認か? ——政治・哲学論争』 加藤泰史監訳 法政大学出版局)。
- Gaines, Kevin K., 2018 “The End of the Second Reconstruction.” *Modern American History* 1-1: 113-119.
- Gordon, Linda, 2017 *The Second Coming of the KKK: The Ku Klux Klan of the 1920s and the American Political Tradition*. New York: W. W. Norton.
- Hall, Jacquelyn Dowd, 2005 “The Long Civil Rights Movement and the Political Uses of the Past.” *Journal of American*

- History* 91-4: 1233-1263.
- Hanna-Jones, Nichol, et al, eds., 2021 *The 1619 Project: A New Origin Story*. New York: One World.
- Haller, William, and Alejandro Portes, et al., 2011 "Dreams Fulfilled, Dreams Shattered: Determinants of Segmented Assimilation in the Second Generation." *Social Forces* vol. 89.3: 774-781.
- Hardt, Michael, and Antonio Negri, 2001 *Empire*. Cambridge, MA: Harvard University Press (ネグリ, アントニオ, マイケル・ハート 2003 『帝国——グローバル化の世界秩序とマルティチユードの可能性』水嶋一憲他訳 以文社).
- Harvey, Jennifer, 2017 *Raising White Children: Bringing Up Children in a Racially Unjust America*. Nashville, TN: Abington Press.
- Higginbotham, F. Michael, 2013 *Ghosts of Jim Crow: Ending Racism in Post-Racial America*. New York: New York University Press.
- Hochschild, Arlie Russell, 2016 *Strangers in Their Own Land: Anger and Mourning on the American Right*. New York: New Press, 2016 (ホックシールド, A. R. 2018 『壁の向こうの住人たち——アメリカの右翼を覆う怒りと嘆き』布施由紀子訳 岩波書店).
- Hollinger, David 2000 *Postethnic America: Beyond Multiculturalism*. New York: Basic Books, 2000 (ホリンガー, デヴィッド・A. 2002 『ポストエスニック・アメリカ——多文化主義を超えて』藤田文子訳 明石書店).
- 2011 "The Concept of Post-Racial: How Its Easy Dismissal Obscures Important Questions." *Daedalus* 140-1, Race in the Age of Obama, volume 1: 174-182.
- Honey, Michel K. 2007 *Going Down Jericho Road: The Memphis Strike, Martin Luther King's Last Campaign*. New York, NY: W.W. Norton.
- Johnson, Rucker C., with Alexander Natharyan, 2019 *Children of Dream: Why School Integration Works*. New York: Basic Books.
- Jones, Jacqueline, 2009 "Labor and the Idea of Race in the American South." *Journal of Southern History* 75-3: 613-626.
- Kawashima, Masaki, 1997 "Democracy and Justice in Boston School Busing." *Nanzan Review of American Studies* 19-1: 23-39.
- 2004 "A Progress Report of a Five-Year Personal Project to Revisit the Civil Rights Movement: A Brief Essay Commemorating the Fiftieth Anniversary of *Brown v. Board of Education* and the Fortieth Anniversary of the Civil Rights Act." *Nanzan Review of American Studies* 26: 11-26.
- 2016 "From Dependency to Collaboration toward a More Global Society: The Struggles of Japanese Researchers in the Field of American Studies, from Pre-WWII to the Present." *Nanzan Nanzan Review of American Studies* 38: 41-48.
- 2017 *American History, Race and the Struggle for Equality: An Unfinished Journey*. Singapore: Palgrave-Macmillan.
- Kluger, Richard, 1975 *Simple Justice: The History of Brown v. Board of Education and Black America's Struggle for Equality*. New York: Alfred A. Knopf.
- Kunen, James, 1969 *The Strawberry Statement: Notes of a College REvolutionary*. New York: Random House (クネン, ジェームズ 1979 『いちご白書』, 青木日出夫訳 角川書店).
- Lee, Jennifer, and Frank D. Bean, 2012 *The Diversity Paradox: Immigration and the Color Line in Twenty-First Century America*. New York: Russel Sage Foundation.
- Marable, Manning, 2007 *Race, Reform, and Rebellion: The Second Reconstruction and Beyond in Black America, 1945-2006*. 3rd ed. Jackson, MS: University Press of Mississippi.
- Minchin, Timothy, 1999 *Hiring the Black Worker: The Racial Integration of the Southern Textile Industry, 1960-1980*. Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press.
- Morgan, Edmund S., 1975 *American Slavery, American Freedom: The ordeal of Colonial Virginia*. New York: W.W. Norton.

- Ness, Immanuel, ed., *Encyclopedia of American Social Movements*. Vol. 1. Armonk, NY: Sharpe Reference, 2004.
- Patterson, James T., 1996 *Grand Expectations: The United States, 1945-1974*, rev. ed. New York: Oxford University Press.
- Pattillo, Mary, 2013, or. 1999 *Black Picket Fences: Privilege and Peril among the Black Middle Class*. 2nd ed. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Pierce, Michael, 2018 "Odell Smith, Teamsters Local 878, and Civil Rights Unionism in Little Rock, 1943-1965." *Journal of Southern History* 84-4: 925-958.
- Piketty, Thomas, 2014 *Capital in the Twenty-First Century*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 2014 (ピケティ, トマ 2014 『21世紀の資本』, 山形浩生, 他訳 みすず書房).
- Primus, Richard A., 2016 "Second Redemption, Third Reconstruction." *California Law Review* 106-6: 1987-1999.
- Rawls, John, 2001 *Justice as Fairness: A Restatement*. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press (ロールズ, ジョン 2004 『公正としての正義 再説』, 田中成明, 他訳 岩波書店).
- Schlesinger, Arthur M., 1986 *The Cycles of American History*. Boston, MA: Houghton Mifflin (シュレジンジャー, アーサー・M 1988 『アメリカ史のサイクル I・II』, 高村宏子訳 パーソナルメディア).
- Steinberg, Stephen, 1981 *The Ethnic Myth: Race, Ethnicity, and Class in America*. New York, NY: Atheneum.
- Valelly, Richard M. M. *The Two Reconstructions: The Struggle for Black Enfranchisement*. Chicago, IL: University of Illinois Press, 2004.
- Vance, J. D., 2016 *Hillbilly Elegy: A Memoir of a Family Culture in Crisis*. New York: Harper (ヴァンス, J. D. 2022 『ヒルビリー・エレジー——アメリカの繁栄から取り残された白人たち』 関根光宏, 山田文訳 光文社).
- Walker, Anders, 2009 *The Ghost of Jim Crow: How Southern Moderates Used Brown v. Board of Education to Stall Civil Rights*. New York: Oxford University Press.
- Walters, Barbara, 2022 *How Civil Wars Start: And How to Stop Them*. New York: Crown.
- Ward, Nochol, and Jean Vatarova, 2023 "Frequently Requested Statistics on Immigrants and Immigration in the United States, March 14, 2023." In *Migration and Policy Institute*. <https://www.migrationpolicy.org/sites/default/files/publications/frs-print-2023.pdf> (accessed August 24, 2023).
- Waters, Mary C., and Philip Kasinitz, 2010 "Discrimination, Race Relations, and the Second Generation." *Social Science* 77-1: 101-132, 424-425.
- Watkins, Hollis, 2016 *Brother Hollis: The Sankofa of a Movement Man*. Oakland, CA, 2016 (ワトキンス, ホリス 2019 『公民権の実践と知恵——アメリカ黒人草の根の魂』, 樋口映美訳 彩流社).
- Webb, James, 2023 "Diversity and the Myth of White Privilege." *Wall Street Journal*, July 23, 2010: A17.
- Whitman, James Q., 2017 *Hitler's American Model: The United States and the Making of Nazi Race Law*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Wilson, William Julius. *When Work Disappears: The World of New Urban Poor*. New York: Knopf, 1996 (ウィルソン, ウィリアム・J. 1999 『アメリカ大都市の貧困と差別——仕事が無くなる時』, 川島正樹, 竹本友子訳 明石書店).
- Woodard, Colin. *American Nations: A History of the Eleven Rival Regional Cultures of North America*. New York: Penguin, 2012 (ウッドワード, コリン 2017 『11の国のアメリカ史——分断と相克の400年(上)(下)』, 肥後本芳男, 他訳 岩波書店).
- Woodward, C. Vann, 1974, or. 1955 *The Strange Career of Jim Crow*. 3rd. ed. New York: Oxford University Press (ウッドワード, C. V. 1977 『アメリカ人種差別の歴史』, 清水博, 他訳 福村出版).
- Xu, Kenny, 2021 *An Inconvenient Minority: The Harvard Admissions Case and the Attack on Asian American Excellence*. New York: Diversion Books.
- Yates, Larry. "A Response to Webb's 'Diversity and the Myth of White Privilege'." In *Virginia Organizing*. <https://virginia-organizing.org/a-response-to-webb-s-diversity-and-the-myth-of-white-privilege/> (accessed August 22, 2023).
- Yuill, Kevin L., 2006 *Richard Nixon and The Rise of Affirmative Action: The Pursuite of Racial Equality in an Era of Limits*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield.

付録 1：現地調査の思い出

(1) ボストン「バス通学」命令論争

① Arthur Wendell Garrity, Jr., Boston, MA, January 9, 1996



★1974年6月24日の評判に評判の悪いボストン市教委に対して「バス通学」命令判決を下した連邦地裁判事である彼に直接インタビューできたのは本報告者が獲得した「フルブライト若手研究員」の地位と称号のおかげであった。ギャリティ判事(1920-1999)は「今から振り返って言い残したい反省点や文句など」を訪ねた際に、「憲法上、自ら下した判決への論評は退職後も禁じられているのだが」と前置きしつ

つ、「最高裁がブラウン判決に即した隔離廃絶実行命令を、僅かな事務員しかいない地裁判事に全権委任したのは何とも不首尾だった」と、「リベラルな最高裁長官」として歴史的評価の高いアール・ウォレンを手厳しく批判したのが印象的だった。彼の執務室の壁にJFK(ジョン・F・ケネディ)とRFK(ロバート・F・ケネディ)の写りが飾ってあることは、彼を含めたアイルランド系移民の気概を示している。判事は「二人は私の永遠のアイドルである」と断言したことを本報告者は今でも鮮明に覚えている。

② Robert Cordell Wood, Boston, MA, March 24, 1996



★ロバート・コーデル・ウッド氏(1923-2005)は1960年代後半にHUD(住宅都市開発省)次官(1965-69,最後は同省長官)としてLBJ(リンドン・B・ジョンソン)の「貧困との戦争」の最前線に立ち、ニクソン政権初期には同省長官も務め、その後に長らくMIT(マサチューセッツ工科大学)の教授も務めた、典型的な南部出身の冷戦リベラル派である。ボストンの「バス通学」命令をめぐる紛争に関する聞き取り調査を続行中の本報告者に対し、彼は日本人の書による掛け軸を掲げた別室に来るように誘い、第二次世界大戦従軍中の私的なある「決断」について語った。それは1944年のノルマンディー上陸戦後のドイツ国防軍との熾烈な戦いの山場であるバルジの戦いで日系部隊に命を救われた経験であった。

それを契機に、ミズーリ州セントルイス生まれの彼は「人種」隔離廃絶を誓った。その直前に多大な犠牲を払って日系第442大隊に助けられたテキサス大隊の話を知る、後に大統領としてウッド氏を閣僚に抜擢したLBJもおそらく同じ思いを抱いていたものと推察される。

(2) リトルロック学校危機

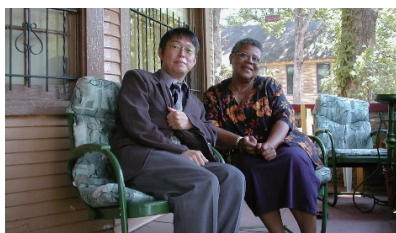
① Elizabeth Ann Eckford, Little Rock, AR, August 23, 2002



★アーカンソー州リトルロック市にある名門セントラル高校の約 2000 人の生徒の中に僅か 9 名の黒人生徒の入学命令に抗議して 1957 年 9 月 4 日の新学期初日にエリザベス・エックフォード氏 (1941 生) は自宅に電話がないために自宅待機の連絡がいかず、ただ一人登校し、数千名の白人暴徒に囲まれた。インタビュー当時州裁判所で保護観察官を務める彼女

はその時の場面に話が及ぶと突然泣き叫び始め、隣の部屋から銃を手にした警護官が乱入し、本報告者は危うく射殺されるところだった。

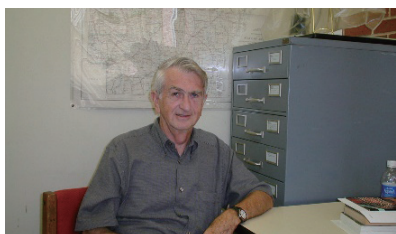
② Minnijean Brown-Trickey, Albany, AR, August 24, 2002



★訪問当時国立公園史跡となっていたセントラル高校前のガソリン・スタンドでナショナル・パーク・レインジャーを務めていた彼女のお嬢さんのスピリット・トリッキー (Spirit Trickey) 氏と幸運にも出会い、勇敢にもカフェテリアで暴言を吐いた白人男子生徒の頭にチリスープをかけて 9 名の黒人生徒中ただ一人退学処分となった伝説のヒロインであるミニジーン・ブラウン氏 (1941 生) を紹介された。彼女はそ

の後カナダで修士号を取得し、クリントン政権下で連邦内務省労働力多様性担当次官代理に指名されて帰国した。お嬢さんのスピリットとの出会いは偶然であり、本報告者は天にも昇るかのような幸運に酔いしれた。退学処分後のミニジーンの人生が彼女の努力と幸運によって真っ当であった事実は、社会運動史家にとって心強い事例の提供であった。

③ Jerry Franklin Dhonau, Little Rock, AR, August 21, 2002



★地元有力紙『アーカンソー・ガゼット』の敏腕記者だったジェリー・ドナウ氏 (1934-2018) は、その後にアーカンソー大学の教員も務めた、物静かで客観報道に徹する姿を彷彿させる学者肌の人物であった。このような人材が地方にあふれるほど存在するアメリカ民主主義の底力を感じずにはいられなかった。彼は 1952 年にセントラル高校を卒業後に市内の短大とアーカンソー大を経てコロンビア大学ジャーナリズム

大学院を修了し、地元有力紙の記者となった。高校生の頃から『ガゼット』紙のスポーツ面に寄稿していたが、1957 年 9 月 4 日に起こったセントラル高校前に数千名の白人群衆が暴徒化したことが象徴する「リトルロック学校危機事件」の一部始終も取材し、市内版編集者として事件の「悪役」であるオーヴァル・フォーブス州知事にも取材したという。事件の一番の責任者は誰かとの問いへの答えは「明らかに州知事である」と明快だった。事件中沈黙した地元選出のフルブライト (James William Fulbright) 上院議員への敏腕記者の批判も忘れられない。

④ Ron Hughes, Little Rock, AR, August 23, 2002



★一連の騒動の中で学校閉鎖後を経て「人種統合」の下で再開校されたセントラル高校に1959年に入学したロン・ヒューズ氏は生徒自治会のクラス代表に選出された。彼の「学校危機」の印象は何といても市内中心部居住区の白人の大人たちが皆「街区破壊商法」^{アロクバスター}を恐れていたことだった。悪徳不動産業者に雇われた障がい者（を装う？）黒人がまず居住区に迷い込んだふりをして訪れ、その後不動産業者が狙いを定め

めた住宅所有者の自宅を買い叩き、その後富裕な黒人に不当に高く売りつけるという、「人種」にまつわる偏見を煽って不当に儲ける悪徳商法である。加えて、1957年9月4日の暴動に際しては、参加者の一部に州外からの白人過激派が含まれていたことは自動車のナンバープレートから明らかだったという。彼の話でもう一つ特筆すべきは、彼が本報告者も愛するブルース・ギタリストとして名高いマディー・ウォーターの愛好家という事実である。

(3) オールバニー闘争

①旧 Mt. Zion 教会, Albany, GA, August 11, 2001



★1955年末から1年続いたモンゴメリー・バスボイコットの勝利後に「リトルロック学校危機」が象徴する南部白人民衆による広範な「大衆的反抗」で南部各地の地域的な差別撤廃闘争は停滞を強いられた。それを打ち破ったのは1960年2月1日にノースカロライナ州グリーンズボロで4名の黒人学生が始めたジム・クロー施設への「座り込み」闘争でSNCC（学生非暴力調整委員会）が創設され、翌年春に「自由乗車運動」を主導したCORE（人種平等会議）と共に非暴力直接行動を開始した。出遅れた感が否めないキング牧師とSCLC（南部キリスト教指導者会議）は綿花畑とピーナッツ畑が広がる女

時亜州南西部の小都市オールバニーを地域闘争の拠点に選ぶが、翌年末までに挫折し、撤退を余儀なくされた。SCLC（南部キリスト教指導者会議）最初の闘争は「失敗」の烙印を押されたが、地元民主にとって地域闘争に終わりはなかった。その拠点となったのがオールド・マウント・ザイオン教会（Old Mt. Zion Church）であり、現在は市民権運動博物館となっており、毎月第二土曜日には当時と同じくゴスペルを歌いながらの体験的なイベントが催され、訪問客と共に地元の次世代住民が運動の伝統を今に残している。最後は腕を交差させて組みながら歌う“We Shall Overcome”で締められる。

② Charles Sherrod, Albany, GA, August 8, 2001



★伝説的なヴァージニア生まれのSNCC活動家のチャールズ・シェロッド氏（1937-2022）が「その後」の活動の地として終の棲家として選んだのはジョージア州オールバニーだった。彼から訪問を許可された時間は早朝の6時だった。彼は当初本報告者の素性を疑い、かなり警戒心を示したが、間もなくその純粋な歴史家的な意図を理解し、温かく接して

くれた。彼の過度とも思われる警戒は「ブラック・パワー」の唱道以降に本格化したFBIなど当局による執拗で厳しい監視と諜報活動の経験を物語っていた。「いつオールバニーの運動は終わったのか？」という問いへの彼の答えは、「簡単だ。けっして終わらないし、今でも続いている。今でも何かが起これば、すぐにデモ行進が組織される。」白人活動家とのつながりを大事に考えた彼は「ブラック・パワー」のスローガンへの転換以降のSNCCと次第に距離を取るようになり、間もなく脱退し、オールバニーを拠点にして独自の地域的組織化活動に専念するようになった。

③ Willie Mae Thomas, Albany, GA, August 7, 2001



★ウィリー・メイ・トマス氏（1928-2014）の自宅は旧マウント・サイオン・バプテリスト教会のまさに隣にあり、「無届デモ」の廉により逮捕された経験を有する。デモ参加者に女性が多かった理由は職を失うことへの深い不安感からだったという。それにもかかわらず、多くの地元民衆が留置場を埋め尽くすというSCLCの戦略に呼応したが、地元警察署長ブリチュットの方が準備は上だった。いつAM(オールバニー運動)

は終わったか？という問いへの答えは、ただ「難しい」だった。運動は失敗だったと言われるが、どう思うか？との問いへの次のような回答が印象的である。「そういうことを、キング牧師が言っているというような噂はあった。しかし地方の目から見て、ダウントウンの商店への出入りやランチカウンターの開放は、このあたり〔川島註：黒人居住区のこと〕に商店がほとんどないので、私たちにはありがたかった。」

④ Albany Herald, August 9, 2001, p. 1



★地元紙『オールバニー・ヘラルド』の1面で紹介された本報告者の現地調査活動。実は史料の紹介を依頼に地元紙の本社を訪れたのだが、逆に取材を受ける羽目になってしまった。ただし、この新聞報道のおかげで、様々な関係者が自らインタビューを申し出てくれることになった。現地調査後に、Northern Kentucky Universityの友人の夏季講座でオールバニー現地の調査体験話をするようになった。同授業にはAlbany出身の年配の社会人学生が参加しており、非常に緊張を強いられたが、幸い合格点を頂いて安堵した。

(4) アラバマ州バーミングハム闘争

① Rev. Fred Shuttlesworth, Cincinnati, OH, August 22, 2002



★JFKに市民権法（1964）の連邦議会上程の決意をもたらしたアラバマ州の工業都市バーミングハムで1963年5月に起こった苛烈な抗議活動の地元指導者フレッド・シャトルズワース牧師（1922-2011）は、間もなくオハイオ州シンシナティの教会に転任することになっていた。長年の友人であるNorthern Kentucky UniversityのMichael Washington教授の計らいで真夏の日曜日の

ミサに参加し、インタビューを許可された。誰もが知る歴史的ヒーローとの接触が可能となったことは幸運であった。彼の地域闘争は「ブラウン判決」の後、同じアラバマ州内モンゴメリーでのバスのボイコットと並行して1956年から開始されたという。住民は定期的な集會に1000から1500名が集まったが、市内黒人牧師250名中、定期的に参加したのは20名にすぎなかったという。批判がある学童生徒の抗議デモへの動員はSCLCの活動家ジェームズ・ビヴェル（James Bevel）氏の発案だったという。

(5) MFDP（ミシシッピ自由民主党）の活動家たち

① Hollis Watkins, Jackson, MS, August 21, 2001



★今では翻訳本の出版で有名になったSNCCのミシシッピにおける現地活動家で1964年夏の民主党全国大会を前に旧来の差別的民主党に対抗して結成されたMFDP（ミシシッピ自由民主党）の中心メンバーでもあった、その後NPO法人「南部の本霊^{サザン・エコ}」を主宰するホルス・ワトキンス氏（1941生）には2000年と翌年の夏休みに本報告者は二度にわたってお話を聞かせて頂くことができた。まさにSNCCの「ミシシッピ自由運動」を象徴する、大変に懐の深い、思慮深く、物静かでありながら勇敢で不屈の闘志を秘めた、魅力的な人物であった。何よりも印象深かったのは、「当事者の積極参加」を謳ったLBJ（リンドン・B・ジョンソン）の「貧困との戦争」に拭えないバラマキ的な側面が、地元の黒人指導層の汚職を助長した、という内部批判的指摘であった。この事実を論文に書いてもよいか？ と確認を求めた時に「もちろん！」と即答した彼の清々しい表情が忘れ難い。

自由運動」を象徴する、大変に懐の深い、思慮深く、物静かでありながら勇敢で不屈の闘志を秘めた、魅力的な人物であった。何よりも印象深かったのは、「当事者の積極参加」を謳ったLBJ（リンドン・B・ジョンソン）の「貧困との戦争」に拭えないバラマキ的な側面が、地元の黒人指導層の汚職を助長した、という内部批判的指摘であった。この事実を論文に書いてもよいか？ と確認を求めた時に「もちろん！」と即答した彼の清々しい表情が忘れ難い。

② Victoria Gray Adams, Petersburg, VA, August 26, 2000



★MFDPの元メンバーを訪ねる旅の最後にワシントンDCで別の関係者に合う道すがら、歌手としても名高いファニー・ルー・ヘイマー（Fannie Lou Hamer）氏と共に熱心な若き中心的活動家だったヴィクトリア・グレイ氏（1926-2006）の自宅を訪れた時、エネルギーのほぼ全てを消耗し尽して、一言も発することができなかった訪問者に対して、彼女はとても優しく接してくれたことが忘れられない。小学校の教員を務め、軍務についていた夫と共にドイツやタイなど諸外国での生活

を経験した彼女が身の危険を含む有権者登録活動に参加し続けたのは、ゴスペル歌手でもあったヘイマーとも重なる、独特のキリスト教解釈に裏打ちされた奴隷制時代から蓄積されてきたミシシッピ州の黒人民衆文化であったと感じさせる。印象的だったのは「ブラック・パワー」に関する彼女の言及だった。それはある意味でMFDPの活動の必然的帰結だったという。

③ Robert P. (Bob) Moses, Jackson, MS, August 15, 2000



★ボブ・モーゼズ氏（1935-2021）は SNCC が中心になってミシシッピ州のデルタ地帯を中心に 1964 年夏に展開された「ミシシッピ夏季計画」の現地責任者で「ブラック・パワー」運動の強力な唱道者であり、キング牧師と並ぶ伝説的な指導者である。彼は一切のインタビューを断ってきたことで知られていたが、本報告者がミシシッピ州での調査活動において拠点としたハティスバーグに所在する南ミシシッピ大学のカー

ティス・オースティン（Curtis Austin）助教授の姉君の友人を介して接触の糸を手繰ることができ、州都ジャクソンの黒人ゲットーの中心に位置するレイニア（Lanier）高校で「代数プロジェクト」の授業活動に従事する伝説ヒーローに接することができた。なお同校は正門に大型の金属探知機を備え、玄関を入ると男女 2 名の武装警察官の身体検査を受けることで、ようやく「訪問者」のワッペン供与を確保できた。南北を問わず黒人居住区にある公立高校が置かれる厳しい状況を実感した。過酷な現実には打ちひしがれることなく、夢を持って自助努力に励む高校生のために夏休みに開かれる代数の課外授業に没頭するかつての伝説的な不屈の活動家の変わらぬ情熱に、かつて定時制高校の英語教員を 6 年間務めた同様の過酷な状況の経験を有する本報告者は、共感を禁じえず、後ほどこのことをモーゼズ氏に伝えた。

④ Bob Moses, Jackson, MS, August 23, 2001



★前年に引き続いてミシシッピ州への二度目になる訪問の途上でジャクソン市内レイニア高校内の「代数プロジェクト」事務所にボブ・モーゼズ氏を訪ねた。本報告者はかねてより「歴史を動かすのは人が発する言葉か、それとも人そのものか？」と疑問に思っていた。もちろん文書史料を何よりも事実確定の分析素材とする歴史家として「言葉」の重みは承知していたが、ボブ・モーゼズとの出会いによって、その確信は揺らいだ。米国内で FBI の指名

手配を受けたモーゼズはタンザニアのニエレレ大統領の庇護を求めて長年亡命生活を送ったのち、カーター政権下での恩赦を受けて帰国した。長らく息をひそめていたが、マッカーサー財団の支援を受け、ゲットー地区における高校生の自助的学習を支援する NPO 法人「代数プロジェクト」を立ち上げ、SNCC 活動以前の高校教員の仕事に立ち戻った。その後 2006 年より身近で形骸に触れたキング牧師の遺志を継ぐため、コーネル大学から打診されていた寄付講座教授の地位を受入れた。本報告者による二度の夏の訪問が彼の決断の一要素になりえたのではないかと密かに自負している。

⑤ William Winter, Jackson, MS, August 15, 2000

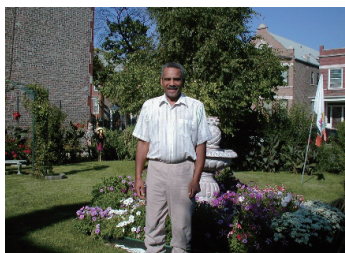


★ミシシッピ州における「第一の再建」の終了後初のリベラル派州知事（1981-84）として辣腕をふるったウィリアム・ウィンター氏（1923-2020）は南部ホスピタリティ溢れる好人物であった。しかしその彼によっても州の旗から旧南部連合旗を除去する州民投票に勝利できなかった。ミシシッピ州が憲法修正第 13 条を批

准するのは1991年になってからであり、それは50州のうちの最後の批准であった。なお彼が手にする陶磁器製ワイングラスは本報告者からのプレゼントである。なお九州産業大学教授の片桐康宏氏のご紹介による。

(6) シカゴ闘争

① Richard Barnett, Chicago, IL, September 2, 2001



★南部での非暴力直積行動の勝利後のキング牧師の活動拠点の地元黒人新聞記者でさえ寄り付かずに殺人事件気を書くという悪名高い「犯罪多発危険地区」のウェストサイドのノースローンデルであった。そのアパートから徒歩3分ほどに所在する閑静で美しい自家所有住宅の自慢の庭に立つのが、本報告者の友人である元シカゴ大学教授でハーヴァード大学社会学教授として名高い長年の友人ウィリアム・J・ウィルソン教授の紹介による地元活動家リチャード・バーネット氏（1932-2020）である。「この地区で一番恐ろしいのは発砲後に身体検査をする警察官ですよ、注意なさい」と具体的な対応方法を教えてくれた彼の忠告で本報告者は実際帰り道の運転の最中に命拾いをした次第である。



★バーネット氏は本報告者を自宅から数ブロックしか離れていないキング牧師が「シカゴ自由運動」の指導のために住み込んだ16th通り沿いのHamlin Ave. 1550番地のアパート跡地に案内してくれた。なおミシェル・アレグザンダー教授の『ニュー・ジム・クロウ』によれば、同地区黒人男性の4人のうち3人は、監獄の出所か間もなく入所予定者であるという。後に同アパートにはシカゴ黒豹党の事務所が開設されたが、間もなくシカゴ市警とイリノイ州警察の特殊部隊の襲撃を受けて壊滅し、本報告者の訪問時も焼け野原のような有様のままだったが、現在は小ぎれいな記念館的な建物が建っているという。翌年夏に再会した折に、「ヒスパニック系との連帯の構築に努力しているが、まだ具体的に報告できかねる」という言葉が忘れられない。

② Barack Obama, Chicago, IL, August 30, 2002



★ウィルソン教授から紹介された人物の一人に将来のアメリカ大統領である、当時イリノイ州議会上院議員だったバラク・オバマ氏（1963生）が含まれていたのはこの上なき幸運であった。何度も彼の法律事務所に電話をかけたが、女性秘書はいつも「貴方のすべきことはホテルで私の折り返し電話を待つこと」の一点張りだったが、本報告者はあるルートからオバマ氏の自宅の電話番号を入手して直接頼み込み、シカゴ市中心部の事務所で「30分だけインタビューに応じる」旨の返事を得ることができた。聡明さと独特のオーラを放つ彼の言葉で印象に残るのは「誰が今までで一番手ごわい相手だったか？」との問いへの「ブラック・パワー政治家である」という回答と、「日本に小浜という地名があるでしょう」という博識ぶりだった。

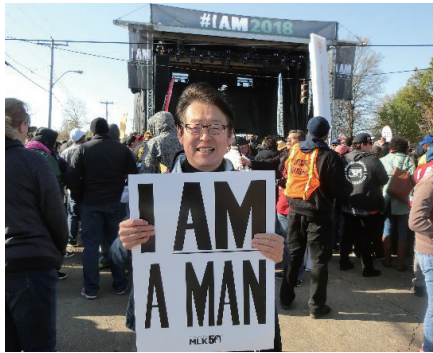
(7) その他

① James Kunen, 名古屋市立大学, 2017年7月27日



★和訳され、日本でもベストセラーになり、全共闘世代のバイブル的なノンフィクションで映画にもなった『いちご白書』の著者ジェームズ・クネン氏（1948生）が、名古屋市立大学教員の平田雅己さんの招きに応じて同大学で講演会を行った。何よりも印象的だったのは、1968年に起こった一連の混乱の中でそれまで応援してきた民主党反戦派のマクガバンが候補指名選挙に敗れ、選挙ボイコットをした結果、ニクソン政権の誕生を招いてしまったことへの後悔の念だった。ただし、2016年の民主党候補にバーニー・サンダースではなくヒラリー・クリントンが選ばれた折、息子さんが同じく選挙ボイコット戦術をとった結果、トランプ政権の誕生に手を貸してしまった。「歴史は繰り返される」結果となったことに、さらに後悔の念が募ったという。

② Masaki Kawashima, Memphis, TN, April 4, 2018



★キング牧師の「最後の聖戦」はテネシー州メンフィスの「衛生労働者」と婉曲に呼ばれたゴミ回収非正規労働者の組合創設と待遇改善を要求するストライキ闘争の支援であり、キング牧師はそれを「貧者の行進」の出発点として設定する構想を立てた。なお写真は、メンフィスにおけるキング牧師暗殺50周年の記念集会黒人労働者が黙々とストライキの行進を続けた際に掲げた「私は人間だ」の標識をUAW（全米自動車労連）参加者から譲り受けて撮影したものである。同集会では2020年民主党有力大統領候補のバーニー・サンダース（Bernie Sanders）



上院議員もゲスト話者の一人だった。その際彼は「次期大統領」として紹介され、大変なアジテーターぶりを発揮する演説を行った。

★黒人および白人の労組員を中心としたデモ参加者は皆「私は人間である」というプラカードを掲げていた。集会後、5キロほど離れた郊外の黒人中産階級地区に所在するメイソン・テンプル教会までデモ行進が行われた。同デモ行進には迷彩服に身を包んだ武装した州警察特殊部隊が警護に当たっていたが、その大半は黒人警察官であり、のんびりした雰囲気満ち、道端で昼寝している者もいるなど50年後の違いを目の当たりにした。

③ Mason Temple, Memphis, TN, April 6, 2018



★実は本報告者のメンフィスの訪問は二度目だったが、今回はNHKアメリカ総局特派員で、本報告者の三重大学における最後の指導生だった、現地取材に訪れていた須田正紀氏の取材クルーと昼食を共にする機会があった。彼らと共にキング牧師が市の前夜に内外の1万名近い聴衆に有名な最後の「山上演説」を行った、修理中で入場が禁じられていたメイソン・テンプル教会に特別に入場を許可された。本報告者が立つのはキング牧師が最後の演説を行ったと同じ説教台である。

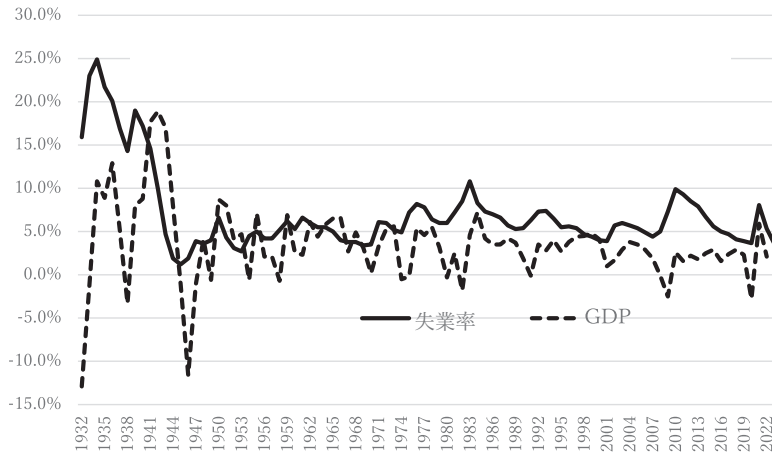
④ Steven Lockwood, Memphis, TN, April 3, 2018



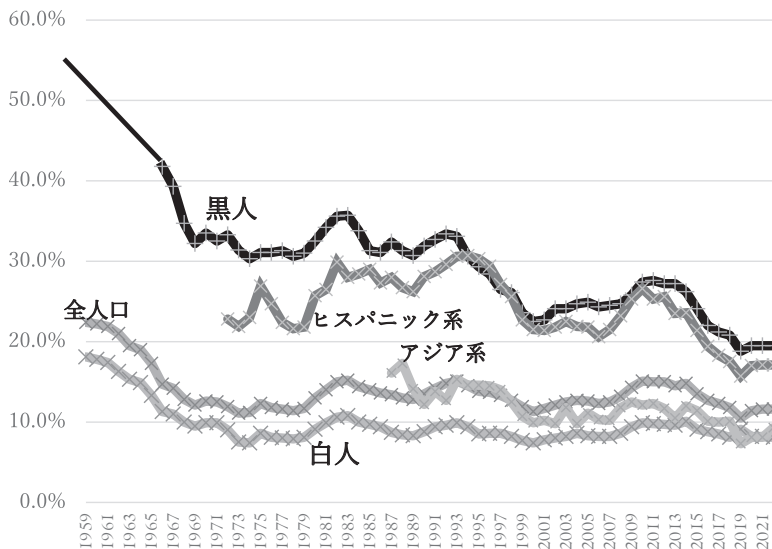
★メンフィス滞在中に友人のワシントン大学タコマ校のマイケル・ハニー教授から紹介された現地歴史ツアーの一環で、黒人低所得者に自家所有を実現するための支援活動を業務とするNPO法人 Frayser Community 開発法人の創設者ロックウッド氏に色々と活動や理念についてご教示いただく機会を得た。「非営利活動と雖も採算を度外視しては持続的な活動は不可能だ」としてMBAを有する黒人女性役員を新採用したという。「リーマン・ショック」と長期「大不況」を世界にもたらした、ゲッター

住民に対する「サブプライム・ローン」による詐欺的な商法とは全く違って、就職支援も含んだ地域社会における持続可能な黒人貧困世帯自立支援という困難で根気のいる社会事業を続ける彼の弛まぬ情熱にこそ、弛まぬ「長い市民権運動」の持続力の一端を、本報告者は実感できた。このようなアメリカ発のNPO活動は日本をはじめ世界に広がっている。(了)

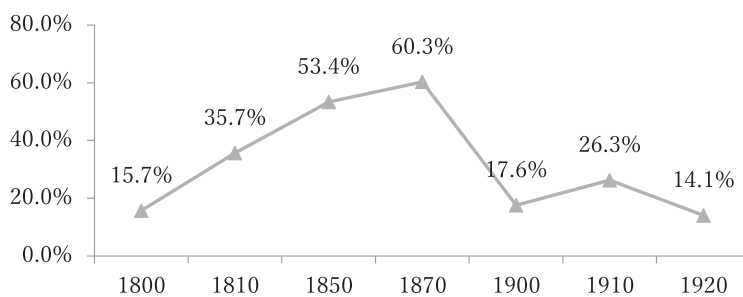
付録 2：主要経済統計数値の歴史的推移



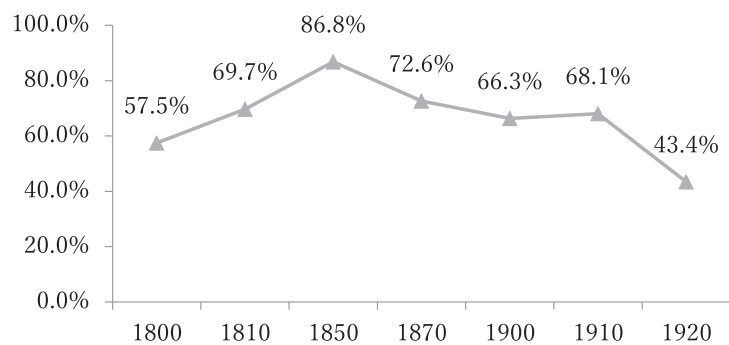
グラフ 1：アメリカにおける GDP 前年比と失業率の推移（1929～2022）
出典：アメリカ政府商務省統計局



グラフ 2：「人種」別貧困ライン未満人口比率の推移（1959～2022年）
出典：同上



グラフ 3 : Percentage of Cotton to Total Exports, 1800-1920

出典 : *Federal Reserve Bulletin*, May 1923, p. 567.

グラフ 4 : Percentage of Exports to Total Production of Cotton, 1800-1920

出典 : 同上

In Pursuit of Historical Meaning of America in the Civil Rights Era

Prospect for the Third Reconstruction under the Second Redemption with Personal On-the-Spot Research Experience in Retrospect

Masaki KAWASHIMA

要 旨

本稿は、2023年11月18日土曜日14時から18時にかけて東北アメリカ研究会との共催で東北大学川内キャンパスにて開催された「2023年度 東北大学国際文化研究科科長裁量経費プロジェクト『多文化・グローバル社会におけるアメリカ研究ネットワークの構築』第一回講演会」で本稿筆者が行った「『市民権運動の時代のアメリカ』の総括へ向けて——かつての現地調査を振り返りつつ『第二次復権^{セカンド・レデンプション}』を超えて『第三次再建^{サード・レコンストラクション}』を展望する試み」と題して行った講演会時の読み上げ原稿を基に、当時の雰囲気を残すために、本稿筆者を「報告者」と記述するなど、口語体を使用し、また活字化する時点（2024年2月）で気づいた勘違いの修正と、必要と思われる説明文や参考文献等の付加を施した上で改稿したものである。その内容の概略と目的は、筆者が以前に科学研究費補助金の支給を5年間得て行ったアメリカ各地で行ったかつての活動家たちへのインタビューを基にした現地滞在研究を振り返りつつ、トランピズムが隆盛する今日までの「市民権運動後のアメリカ」に焦点を当て、「第二次再建」の達成を確認し、その収束後の現在における「第二次復権」のさなかにあって「第三次再建」の展望を探ることである。なお末尾には、かつての代表的インタビュー어의写真付き紹介や統計的ビジュアル資料が、付録として収録されている。